
伸ばした手のチョット先にある、お月様

白い黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伸ばした手のチョット先にある、お月様

【Nコード】

N79640

【作者名】

白い黒猫

【あらすじ】

『無理せず気ままに楽しい人生』をモットーに生きる黒沢明彦。そんな彼が、チョットいいなと思った同期の女の子に、気がつけば振り回されて……。社内恋愛を繰り返した男が最終的に行き着いた先は？

『近距離恋愛シリーズ』の第二弾となります。自分の手の届く範囲で恋人探しをする男性の物語です。

ある結婚の風景 （前書き）

この作品は、『半径3メートルの箱庭生活』にも登場する、黒沢明彦の社会人生活です。かといって番外編ではなく、一人の男が彼のりのポリシーをもって生きてらこうなったといったのを描きたくて書いています。物語的には、『半径3メートルの箱庭生活』より三年程前の時代から始まります。

ある結婚の風景

>i13844—1603<

白いタキシードに、白い手袋。どこぞの英国紳士といった格好の俺。典型的な日本人顔で日本人体型の俺に、その服装が似合っているとは、お世辞でも言い難い。

こんな仮装のような格好するのは、恐らく一生に一度の事だろう。

何故俺が、こんな馬鹿げた格好をしているのかって？ 今日俺の結婚式だからだ。

先程、ホテル内の教会で無事式を終えた俺と妻となる女性は、披露宴会場の入り口でやや緊張しながら出番待ち中。

隣をみると、純白のドレスに身を包んだ彼女が、緊張した様子でブーケをギュッと握りしめ立っている。

その様子がなんとも可愛らしく、思わず笑ってしまう。男と違って、女性はこのいうドレス姿になると、ビックリするくらい雰囲気が変わる。どちらかというと『可愛い』という雰囲気彼女が、今日は『綺麗』に見えた。

同じ会社に勤め、映画という共通な趣味から付き合うことになり、交際一年で結婚という、ごくごくありきたりな出会いと恋愛から結婚することになった。

「緊張してる？」

隣の彼女は、俺の言葉にコチラをみて縋るような目で見上げてくる。

「折角の俺達の結婚式、楽しもうよ」

俺の言葉に、彼女はパツと顔を明るくして嬉しそうに笑う。

「ですよね！ 二人で楽しみましょう」

そして手にしたブーケを胸元にあげ、気合いを入れるように深呼吸する。

彼女のは教会の時は流れるようなデザインだったが、今は、コンモリと盛り上がったまん丸な形でお月様のようなタイプのモノを持っている。まったくデザインは違って見えるけれど、実は二つは同じもの。挙式用の時にブーケの一部を取り外しでき、披露宴用の小さなめかじユアルスタイルと変化する。さらに一部がブートニアとなるのものを持っていると色々、小技の効いた優れたものだ。

以前、月見里百合子が、『凄いでしょ！』と、このブーケを俺の前で合体分解して見せて、楽しそうに自慢しているのを思い出す。

まもなく扉の向こうで司会者の入場を促す声が聞こえ、二人で相談して決めた思い出の映画音楽のイントロが鳴り響く。

俺達は頷きあって、腕を組み、胸を張り、おもむろに開かれた扉から披露宴会場へと踏み出した。

ある結婚の風景 (後書き)

【ある結婚の風景】 S c e n e r u r e t t a k t e n s k

a p 1973年 スウェーデン

監督 脚本…イングマール・ベルイマン

勝負（かた）をつける

>i14604—1603<

『人間は、無理しないで手に入れた物に囲まれていたほうが幸せになる』って、酔っぱらった親戚のオジサンが偉そうに言っていた。

『何だ？ それ？』　って言いたくもなるが、意外に的を射た言葉だったりする。

様々なものを犠牲にして無理して手に入れたものを必死で守っていきるより、自分の身の丈にあった世界で自然に生きていく方が幸せって事はあるだろう。無理をしなければ、それなりの幸せを堪能することができるものである。

俺はそれまでの人生、ノリの良さと明るさで、それなりに上手くやってきたと思う。イケメンとは言えないけど、女の子からのウケもよく彼女に困るということもなかった。持ち前の要領の良さもあり、楽しく面白く過ごしてきた。

そんな俺の人生初めての挫折は、就職活動だった。自分にそれなりに自信があっただけに、就職なんてすぐ決まると思っていたし、社会に出ても今まで通り面白おかしく過ごしていけるのだろうと、愚かにも信じていた。

しかし『景気は上向き傾向』という政府の言葉はどこやら、新卒者の就職は年々厳しいものとなっていた。

最初は誰もが知っているような、所謂大企業を目指したものの、二流大学の俺は人事の人と顔を会わす前の書類審査の段階で、落とされまくる状態。

行きたかった企業は夏休み前に求人を締め切ってしまった。俺は

大学の就職課で必死に求人票を探り、殆ど興味のなかった業種の企業など範囲を広げることになった。

いい加減着飽きたリクルートスーツに身を包み熱い夏の日訪れたのは、株式会社モリシマという、正直生まれて初めて名を聞くような印刷会社。

自社ビルとはいえ、小さい鉄筋コンクリート四階建てのその会社は、素敵な会社とは言い難い。

「こんにちは！ 面接に参りました黒沢明彦です」

受付で挨拶をすると、愛想のない女性社員が応接室に面倒くさそうに案内する。俺は得意の愛想笑いを浮かべその社員にお礼を言いながら部屋に入った。

中では、俺と同じように面接を受けに来たと思われる、小柄の女の子が応接室の長いすの方にチョコンと座っていた。

俺はその子に『ドモ』といいながら、隣に腰掛けた。その子も、俺に対して軽く頭を下げる。シャンプーの良い香りが、鼻を^{くすぐ}擦る。

左右の髪をキッチリ編み込んでからバエツタで背後に纏め、それを長い後ろ髪と一緒に流している。暗めな典型的なリクルートに身を包んだその子は、目も鼻も口も全てが小粒という感じの地味で大人しそうな女の子だった。

キョトンとした感じの丸い目が、なんか兎を連想させる。

少し早めに来たこともあり、応接室に二人だけで待たされる。ハッキリいって手持ち無沙汰。横目でその子の様子を伺う。何故か大きいバインダーを大事そうに膝の上で抱え、緊張しているようである。小さく深呼吸をしている。

コチラの視線に気がついたのか、不思議そうに俺の方を見る。意味もなく見つめあう形になる二人。チョット気まずい……。

彼女は突然ニコッと笑う。穏やかで人柄の良さそうな柔らかい笑み。俺もその子の笑顔について釣られて、笑い返す。

コレが、俺のその後の数年を散々なものにして、もう一つの挫折を味合わせてくれる存在『月見里百合子』との初めての出会いだった。

勝負（かた）をつける（後書き）

【勝負^{かた}をつける】Un nome La Rocca 1961

仏西独

監督…ジャン・ベツケル

現在が舞台の小説で、初めて男性視点で描いているので、不自然な所があるかもしれません。もしあったら是非教えて下さい

彼女を見ればわかること

小さい会社ということもあるのだろう、人事課なんて独立した部があるわけもなく、初っぱなから社長、専務、総務部長との面談という状況だった。

今まで、上手くいって人事部面接という感じだった俺からいうと、一見かなりの進展したようにも思える状態である。

隣の女の子は、応接室に現れた面接官をみて、飛び跳ねるように立ち上がりペコリとお辞儀する。サラサラと長い髪が彼女の肩を滑るように落ちる。

俺も慌てて同様に立ち上がりお辞儀する。

彼女の名は月見里百合子で、短大を出てその後専攻課に一年在籍したということで俺より一歳年下であるらしい、その子の事がその後の面接官とのやり取りで明かされていく。

なるほど、彼女は美術系の大学に通っているようで、大きいバインダーには彼女が大学で作ってきた作品やプライベートで描いたというイラスト入っていた。彼女はそれを面接官に見せつつ、一生懸命という様子で自分をアピールしていた。学んできた事を生かし、デザインの仕事をしたいと力強く訴えている。

面接官の三人は、明かにその作品にはあまり興味はないようでチラリと軽くみただけ。しかし丸い目をクリクリさせ語る彼女を、目を細め面白そうに見ている。彼女という人物は結構気に入っているようだ。

「ところでお二人とも、パソコンとかは使えるのかな？」

社長の言葉に俺は 勿論と力強く答える。今時この年齢でパソコンが使えないという人はいるのだろうか？ 大学まで出ていたら、

レポートの作成のためExcel Wordといった基本ソフトは大概使えるようになるものだ。

「はい！ あと趣味の範囲ですが、Illustratorなど画像系のソフトもそれなりに使えます。ブログを作成しているので！」

彼女も、パソコンくらいは普通に使えることをアピールする。でも、俺とはやや使えるという意味が違うようだ。

「ほう、ブログを！ それは凄いな！ そんな事が出来るなんて」

しきりに感心する社長の言葉は、面接というより孫を褒めるような口調だ。今時ブログなんて誰でもつくれるよ……。と内心思いながらも、俺は作り笑顔でそのやり取りを見ていた。

「はい『月夜の映画館』というタイトルのブログで、映画の評論とかやっています」

これが面接なのだろうか？ というノリで平和に穏やかにニコニコと微笑み合う、彼女と面接官。この会社がオカシイのか、この子のキャラクターがそうさせるのかはよく分からない。

その後なんと社長自らが社内を案内する。社長って暇なのか？

逆に社員の人は皆忙しいのだろう、俺達見学者を面倒臭そうにチラリだけみて、また仕事に戻る。

そんな現場の迷惑そうな空気を社長は読んでないのか、やたら社員に声をかけ、今やっている仕事の説明を求めていく。

俺自身も彼らがどんな仕事をしているのかなんて、正直どうでも良かったが、隣の彼女はニコニコとした顔で楽しそうに現場を眺め、その説明を嬉しそうに聞いている。現場の人のブスっとしていた顔

も、その彼女の表情に思わず苦笑する。その様子が面白かったこともあり俺も、気がついたらニヤニヤしながら楽しく回っていた。そんな感じで、今までのの中では、一番良い感触でモリシマの面接が無事終了する。

一緒にビルを出た彼女は、会社を出た途端に大きく深呼吸をする。その様子で、実は面接中彼女がかなり緊張していた事を改めて理解する。コチラは彼女の何とも惚けた面接の様子を見て面白がってしまったお陰で、緊張をまったくしなかったことにも同時に気がつく。

「お疲れさま」

彼女に声をそっと掛けると、俺が隣に居たことを、今思い出したかのように身体をビクリとさせてコチラを見た。

「あ 黒沢さん？ も、お疲れさまです」

でもすぐに、あの独特の穏やかなニツコリ顔になり言葉を返してくる。

『疲れたよね？ 良かったら、チョットお茶でもしていきますか？』と返そうかなと考えていた。

「お互い、良い会社に行けるといいですね。頑張りましょうね！じゃあ、失礼します」

しかし、彼女に先にそう言われてしまう。

「ですね、では気をつけて！ また縁があれば」

ペコりと頭を下げて去っていく。

サラサラとした長い髪が風に揺れる彼女の背中を、俺はしばらく眺め続けた。

彼女を見ればわかること（後書き）

【彼女を見ればわかること】 1999米

Things You Can Tell Just by Looking at Her

監督 脚本…ロドリゴ・ガルシア

オーバー・ザ・ムーン

俺は下宿に戻り、窮屈なスーツをサッサと脱ぎ捨て、シャワーを浴びてからパソコンに向かう。

メールをチェックし、いつものように就職ナビサイトを巡る。コレといった良いニュースはないようだ。台所に行き冷蔵庫からビールを取り出し再びパソコンの前に戻る。

一口ビールを飲むと口の中に気持ちのよい冷たさと苦さが広がる。暑さと苛立ちがやや紛れる。ふと頭に『ある言葉』が浮かび、検索欄にその言葉を入れクリックする。

「コレだ！」

目的のサイトはすぐ見つかった。

三日月にチョココンと兎がこしかけた可愛いイラストの『月夜の映画館』という映画ブログ。片方の長い耳を垂らしてキョトンとした惚けた感じの兎のイラストは何処となしに彼女に似ていた。

記事をさっと、見てみると、彼女は単なる映画好きというよりかなりのマニアな事が伺える。一般の人があまり知らないような単館系の映画を中心に楽しんでいるようだ。

そして記事の最後には、ニッコリした兎や、顔を真っ赤にして怒りくるっている兎、泣いている兎のイラストとともに、その上には新月から満月の月が表示されている。どうやら映画への満足度がその月の満ち欠けで、率直な映画への感情がその兎の様子で表現しているようだ。

「『隠された記憶』コレまで見てるんだ！」

これは日本でも渋谷の一劇場でしか上映されなかった、知る人ぞ

知るといふ感じの名作である。といっても万人が楽しめるものではなく、その内容はなんとも不可解、観る人が映画を観ながらその態と欠けて表現されているものを補っていく必要のある作品だ。また謎を多く残すラストシーンは映画ファンの間でも、物議を醸し出しているそんな作品。その映画の感想の下には、満月とビックリ顔の兎が表示されている。

俺は『加害者と被害者がどこまでも交わらず互いを傷つけていく、虚しい連鎖の悲劇。そしてラストは新しい悲劇の連鎖の始まり』と解釈した映画を、彼女は『どうすれば加害者が救われるのか？』について語り、そしてラストを被害者が加害者に癒しを与えるために行動を起こした』と面白い解釈をし、評論をしていた。

「へえ〜！」

面白くて思わず、コメントいれようかとも思ったが、知り合いというわけでもないけど、まったく知らない人の振りしてコメントするもの何か変な気もするし、また『今日会った者です』と言ってコメントするのも怪しい。

お気に入りそのサイトを登録し、読者としてだけ楽しむ事にした。

映画好きの両親に育てられた事もあり、俺自身もかなりの映画好きになっていった。小学校の時から、子供向けではないような映画まで観させられてきた事もあり、俺自身はかなりの映画マニアに育っていた。

そんな俺の目からみて、そのサイトはかなり面白く感じた。

『月』の名前で、ブログを管理する彼女。映画だけをブログで語る彼女だが、映画の評論から、暢気な感じに見えて意外に冷静に厳しく物事を見る人だというのがよく分かった。

そしてもう一つ気がついたことがある。このブログの常連の一人
でよくコメントを残している『星』という人物と彼女の恋人らしい
ということ。

『月』というハンドル名の彼女に対して、『星』というハンドル
名をつけてくるそのセンス、かなり恥ずかしいヤツだ。

でも彼女はそんな事、まったく思っていないようで、『星』という
人物に対して、明らかに他の来訪者とは違った嬉しそうな親しみを
込めたコメントを返している。時々、思い出まで交えて語られるそ
のやり取りは読んでいるコチラが恥ずかしくなってくる。

二人は遠距離恋愛なのか？ 一緒に映画を観ている感じではない。
何故メールではなくこんな所で対話が続いているんだ！ と突っ込
みながら、そのやり取りコッソリ見続ける俺も俺だが……。このブ
ログは就職活動で戦う俺の、良い息抜きにはなった。

後日モリシマから連絡がきて内定をもらえた。その事で精神的に
楽になった事もあったのか、その後の活動も順調に進むことになる。
秋になり、俺はモリシマを含む四つの会社の内定をとることを成
功し、もうそれ以上の就職活動をするのを止めた。背伸びするのを
止めて、ベストでなくベターの結果を求めたことの勝利ともいえる
だろう。

一つは大手消費者金融の会社で、もう一つは建築会社、一つは食
品関係、結局俺はモリシマへの就職を決めた。

※ ※ ※

そして春、真新しい背広に身を包みあのモリシマの小さな自社ビ
ルに足を踏み入れる。一週間の研修を過ごすことになる会議室へと
案内される。

部屋に入ると四人の女の子が一斉にコチラを向き、チョットビビ

る。

どうやら、今年の新入社員で男は俺一人だったようだ。この四人の女性が俺の同期となった。

スラリとして和風美人でお嬢様っぽい女性が『河瀬夏美』、日に焼けた黒い肌で元気なスレンダーな女性が『松梨友子』、吊り目で見ること勝ち気で、よく見るとなかなかグラマーな女性が『井口成実』。そして小柄でショートヘアーのニコニコした女性が……『月見里百合子』、彼女だった。

月見里百合子は、俺の顔を見て、懐かしそうな親しみを込めた笑顔に向けてくる。

「久しぶり……。また会えたね、月見里さんだよね？」

俺は、あの綺麗な長い髪が、見事になくなっていることに軽いショックを覚えながら彼女に声をかける。

彼女はそんな戸惑いなんて気付かないようで、以前と同じあの和む笑顔を向けてくる。既に仲良くなっていた他の女の子らに振り返って、『面接が一緒だった人』と俺を皆に紹介する。

お陰で、女の園である同期の仲間として、すんなり俺も溶け込むことが出来た。そして俺の社会人生活は順調にスタートする。

オーバー・ザ・ムーン（後書き）

【オーバー・ザ・ムーン】1999 米

A Walk on the Moon

監督…トニー・ゴールドウイン

『隠された記憶』はミヒヤエル・ハネケ監督が作成した映画です。
エッセイ『物語に出てきた映画の簡単な紹介』にて、『隠された記憶』についての解説があります。

昨日・今日・明日

社会人生活、研修期間は学生気分のまま楽しめた。ノートをとるふりして眠気と戦いつつ社会人としての心得を学んでいくわけだが、服装が背広にかわっただけで、中身は先月までの俺のまま。三月から四月に変わったただけで人間がそんなに成長したり変わったたりする訳でもない。

元短大生のお嬢様っぽい河瀬さんは見た目のとおり真面目な性格なようで俺とは違って真剣に研修に挑んでいるようだ。スポーツウーマンという感じの松梨さんも俺と同じように研修に退屈しきっているようだが、それを極力顔に出さないように気合いを入れて頑張っている。月見里さんはあの好奇心に満ちた楽しそうな目で研修をうけているようにも見えた。しかし隣からそっと彼女のノートを覗くとあのブログで活躍していた兎のイラストがそこにも登場し、時間とともに増えていつている。研修をうけながら落書きも楽しんでいるようだ。最後に描かれた兎に至っては気持ち良さそうに丸くなって寝ている。

ついこないだまで高校生だった井口なんて完全に会社をなめている。ややギャルが入ったメイクでやってきて、研修中は隠しようもないほど俯せになって寝ている。マナー講座においては、キャツキヤとテンション高くふざけて受けていたために講師に大目玉くらい、それでも反省なく脳天気には笑っている。

その様子を河瀬さんは眉を顰め眺め、松梨さんと俺は苦笑して見ている。

「成実ちゃん、ダメだよ、社会人なんだからもつと真面目なフリ出来るようにしないと!」

お昼をみんなと一緒に食べているとき、月見里さんは井口をそう

窘める。その叱り方もどうかと思うが、自分だってそう真面目にうけていたわけではないので、何もいえない。

それに『エヘヘ』と声を出して笑う井口。化粧していてもこういう笑い方すると、先月まで制服きていた女子高生だったというのがよく分かる。

「でもさく黒くんだって、魂抜けたような顔して聞いてたよ！」

井口はコチラをみてニヤリと笑ってくる。よくあんなにぐっすり寝ていた状況で、まわりの状況も見ていたものだとは別の意味で感心してしまった。

研修中は皆、そんなのんびりした時間とやり取りを楽しんでいた。でも、ノホホンと楽しかったのは研修期間の間のみだった

研修も終わり、配属辞令授与の時がくる。

俺と松梨さんは営業部に、井口は製造部に、河瀬さんはデザイン部に、そして月見里さんは営業部制作課という所に配属されることになる。俺は月見里さんが面接の時からデザイン部を志望していたのを知っていたのでチラリと彼女の顔を見る。いつもニコニコしていた彼女の顔に笑顔はなく、俯いていた。

井口のみが製造部のある本社ビルでそのまま勤務で、他の人はそこから五十メートル離れた賃貸ビルの六階にある営業部が勤務先となる。井口は、『私一人だけこの汚いビルで仕事なんて嫌だ!』と喚いていたがコレばかりは仕方が無い。皆彼女を散々宥めたあと、それぞれの職場へと散っていった。

映画やドラマで営業マンたるものを見てそれなりに知っていたつもりだが、実際やってみると全然違う。最初は上司と一緒に付き添いという形でのスタートであっても、自分が印刷というもの

をあまり知らない事で、ミスも多く現場に怒られるわ、お客様には呆れられるわ、上司に迷惑かけるわ、もう散々である。自分がどうしようもないダメ男に思えてくる。

同じ営業部に配属された松梨さんは、俺と同じような苦勞に加え、お客様がエロ系に強い出版社だった。仕事の内容がセクハラのような事もあり、彼女の眉間の皺が会社にいるとき消えることがなかった。

河瀬さんだけは、元々デザイン系の勉強をしてきていた事もあるのか淡々と何の問題もなく仕事をこなし職場に溶け込んでいるように見えた。

そして月見里さんは、丸顔で頭がバーコードの上司に毎日ネチネチと怒られている。「何度言っても、分からないホントお前馬鹿だな!」「グズグズするな!」「ボケ!」と彼女の上司は兎に角口が悪い。そんな上司にも「はい!」と笑顔を必死で作り仕事をしている。

彼女の課は、営業部にあってもやや特殊で現場に近い仕事の形態をしている。お客様と直に接して相談しながら印刷の元となる版下を作るまでを行っている。

部屋の隅にあるその空間はなんともどんよりしている。いるのは加齢臭が漂ってきそうなオヤジが三人。新人の彼女が一人で平均年齢下げているような状況である。

端からみているだけでも、何か大変そうなクセのある上司ばかりである。特にトップである井筒次長は、横暴でしかも細かく、他の課とぶつかる事も多く社内でも煙たがれている存在で、現場からは嫌悪すらされている。

課の歓迎会の時に、上司が眉を顰め、彼女のいる部署に対してこんな事を言っていた。

「あの子のどのくらいもつかな。あの部署さ、人材育てるのが下

手でさ、もって一年で、みんな半年とかで辞めていっちゃうんだよね。だから同期の君が見守ってあげてよ」

望んだ部署には入れて貰えず、月見里さんはとんでもない場所に行かされたようだ。

席は近いので、色々みえてしまう。見ていると、彼女が印刷物の元となる版下を持って、その陰険な上司に指示を仰ぎにいつているようだ。

「それくらい、自分で考えてやれ！」という怒鳴り声が聞こえる。月見里さんは困った顔で、彼女を無視して再び机に向かって仕事を再開した上司の禿げた頭部ジツと見つめる。

勝手にやったらやったで怒り、指示を仰ぎにいつても怒る。その理不尽な次長に対してコチラが苛ついてくる。

しかし彼女は何故か、あのヘラッとした笑顔になる。

「わかりました！　なら『適当』にやらせて頂きますね！」

『適当』に力を込めてそう言い放ち、月見里さんは上司の席から離れようとする。去っていく部下を次長が慌てて呼び止める。指示は貰えたようで、指示をくれた上司に対して嬉しそうに笑う。

「あの子、大物だな」

俺と同じようにその様子を隣で見ていた先輩が、面白そうにつぶやく。

昨日・今日・明日（後書き）

【昨日・今日・明日】1963伊

I e r i , o g g i , d o m a n i

監督…ヴィットリオ・デ・シーカ

怒りの日

配属が決まってからの同期での飲み会は、愚痴合戦になる。でもこの飲み会が俺たちの仲をかなり密接なものにする。月見里百合子の呼び方も『月ちゃん』にかわり、松梨友子の呼び方は『松ちゃん』、井口成美は年下の為『井口』と変わる。でも何でだろうか？ お嬢様っぽい川瀬夏美だけは『川瀬さん』という呼び方を変える事は出来なかった。

「私が、滅茶苦茶頑張ってやっているのに、ミスばかり指摘してきて、もうムカツク！」

一番声を大きく荒れているのは井口。聞いていたら、彼女の仕事に対する態度にもやや問題があるのでは？ とも思う部分は多い。一番年下ということもあり、こうやって大騒ぎして皆に甘えてみんなに構われ可愛がられる。それが俺達の中での彼女の立ち位置だった。

俺と松ちゃんは、失敗ばかりする自分や、思うようにいかない事への愚痴が多く、それらの愚痴を河瀬さんと月ちゃんが静かに聞いて宥めるという流れができあがっている。

「成美ちゃんが、頑張っているのはみんなも見ていて分かってるから」「友ちゃん、毅然とした態度で仕事している姿、格好いいよね」

本当は、僕が、月ちゃんに言って元気つけてあげたかった言葉が、彼女の口から飛び出す。

そういえば彼女の口からは愚痴なんか出た事ない。いつも楽しそ

うにニコニコ笑っている。

「百合子さんは、楽な職場に行ったから、そんなニコニコしてられるんですよ！」

宥めても気分の収まらない井口が、攻撃を月ちゃんにむけてくる。彼女は未成年なためにソフトドリンクしか飲んでないはずなのに絡む。社会人だから飲ませてもしよいか？　とも思ったが河瀬さんと月ちゃんが必死で止めたから、この集団での飲み会では彼女一人がソフトドリンクである。月ちゃんも付き合っただけなのか、最初一杯以降は、ソフトドリンクにしている。

その言葉に、月ちゃんの部署の大変さを見ている、俺を含む他の三人は流石に眉を顰める。そのまわりの様子に、井口も言い過ぎたという顔になる。

「成美ちゃん、なんで分かって貰えないかな〜この笑顔の陰で泣いてる私」

月ちゃんは冗談っぽくおどけて、泣いたふりをする。

「まあ、月見里さんは笑う事止めたら死にそうだものね、なのでいつもニコニコしてほしいな〜」

ニコっと上品な笑顔でとんでもない事を河瀬さんが言う。河瀬さんの例えや冗談はいつもややズレていて、その冗談や言葉も笑えないところがある。実際、この月ちゃんが笑えなくなるほどの状況になったら本当に危険である。

「何、それ！　私はサメ？　泳ぐの止めたら死ぬ的なのって！」

「サメというより、兎よね」

「それって、単に苗字の月からの発想よね？」

「うーん、いや、人間性？ 肉食系動物には絶対みえないし」

「ハムスターっぽい気もする」

「縁側で居眠りしている猫とか？」

井口、松ちゃんも参加してくる。

「ええー！ もっとカッチョイイ動物がいい！」

月ちゃんは不満な声をあげる、さっきまでのドロドロしていた飲み会が一気に平和なものになる。流石女四人があつまるとキャピキヤピした華やかだ。

なんだろう？ この入っていけない女の子同士の世界。男の俺としてはチョット寂しさを感じる。

「じゃあ、カッチョイイ兎ということだ」

とりあえず、俺も会話に参加しておく。

月ちゃんは、複雑な顔でコチラをみってくる。

「ワイルドな兎って事？」

納得はしていないようだが、彼女はとも見ても兎のイメージだ。しかしワイルドな兎って、どんな兎だ？

いきなり隣に座っていた井口が俺の手をひき突然顔を寄せてくる。

「じゃあ。黒くん私は？ 何？ 動物に例えるならば」

「それこそワイルドな野良猫？」

俺の言葉に皆一斉に笑う。井口だけは無然としていたが……。

こういう他愛ない会に繰り返していくことで、俺達同期は辛い時期を友情で乗り切った。

怒りの日（後書き）

【怒りの日】 1943デンマーク

Vredens dag

監督 製作 脚本…カール・テオドール・ドライヤー

彼女は最高

何事も努力すればなんとかなるものだ。人は成長する。あんなに大変だと思っていた会社の仕事も、慣れと自分のレベルが上がることで余裕も生まれ楽しくなってきた。毎日やっていると知識も自ずとついてきて、コツも覚え、一ヶ月たった頃から一人で仕事をこなせるようになってきた。

元来人と話すのも好きなこともあり、営業という仕事結構天職なのかもしれない。社会人になることで広がった世界が、自分が大人になったことを感じさせ、俺は元来の脳天気さと自惚れを取り戻した。

余裕が生まれると、欲しくなってくるのは彼女という存在。去年就職活動に翻弄されたこともあり、十ヶ月も彼女がいない状態が続いている。小学校時代から彼女らしき人が何やかんや居つづけた俺としてはありえない状況である。なんと侘びしい時間を過ごしてきたというのだろうか？ 俺としたことが。

友達からはタラシとよく言われる俺だが、それは大きな誤解。空気が読めるフェミニストなだけ。

姉妹の中で育ってきたこともあり、女性に慣れている。自然に女性を怒らせない接し方が身についているだけだ。チョットいいかなと思っていて女性困っていたり、悩んでいたりとほっとけない。こういう事を心がけていると、自然に恋愛の芽が発生するといふもの。

社会人になって、身近なところを見渡してみる。一番気になっているのは、やはり月ちゃん。正直いうと、会ったその日から惹かれていたと思う。運命なんて信じていないが、出会いからその後の展開、まるで恋愛映画のようではないか？ たまたま同じ日に面接を

うけた男女は、同じ会社を選択し再会する。そして趣味も同じなこともあり、互いに惹かれる。実際、仲良くなるのも殆ど時間もかからなかった。他の人がややついて行けない、マニアックな話題で盛り上がり、その事が俺達の仲を急速に近づけた。

映画以外の話をしていても楽しくて、一緒にいると凄く癒される。なかなか就職先が決まらず辛かった就職活動の日々も、全てが彼女との出会いの為に布石だったのではとすら感じていた。

しかも同期の他の女の子から、彼女がどうやら前の彼氏とは、とつくに別れて今はフリーであるという事もしっかりチェック済み。だからあの長い綺麗な髪がなくなったのだと納得する。今のショートも、彼女を快活な雰囲気にして、それはそれでキュートで可愛いけれど、やはり女性のロングヘアは男心をどうしようもなく攪るものがある。本当に勿体ない限りだ。

映画にも、一緒に行くようになり、今では堂々とブログにもコメント残していつている。未だに『星』の名前のコメントがあるのが気になるどころだが……。

何度も一緒に映画に行くようになり、社内でもかなり仲の良いと評判の二人になったように思える。非常に良い感じの距離感を築いて、全てが順調に思えた。

エンドロールを静かに見つめる、彼女の様子をそっと伺う。映画を愛しているだけあり、予告編からエンドロールまでシッカリ落ち着いて楽しむ姿勢が好ましい。映画マナーといったら、映画を観ているときは喋らない、携帯の電源を落とす、音を立てない、椅子を蹴らない、暴れないというのが一般的なものだが、そんな簡単な事が出来ない人が本当に多い。映画好きにとって、そういったマナーの悪いヤツが近くの席にいるというのは凄くストレスとなっている事を、もう少し世間の人に知ってもらいたいものだ。携帯バイブ音をいつまでも鳴らすヤツ、さらに映画館で携帯のバックライトを煌々とさせ何かしているヤツ、レジ袋をずっとガサガサさせるヤツ、

映画を愛する多くの人がそういった行為を腹立たしく、場合によっては死んでくれ！とまで思っていたりする。

そう、ずっと喋っている後ろの席のカップルを、態々振り返って睨み付けている隣の月ちゃんのように苛立っているのだ。温厚な彼女がこんな殺気立った顔をする程、そう言ったヤツらは映画好きを苛立たせているのだ。

また、残念に思うのは、映画が始まってから堂々と入ってくる人、たかだか数分の事なのにエンドロールが流れ始めた途端に席を立てて劇場を後にする人、これが意外多いこと。作品によってはオープニングに重要な秘密が隠れているものや、エンドロールの後に物語があることがある。またエンドロールも作品の一部であり、最初から最後までシッカリ見ることが、映画を本当に楽しむというものではないだろうか？ またエンドロールを見守るのも、そこに流れている映画の製作に携わった人達への敬意を払うという意味でも大切な事である。

彼女は、その文字を時々頷きながら、静かに目で追う。最後まで見てから、俺の方を向き笑いかけてくる。

「なかなかの、世界感だったね。なんか横溝小説っぽくもあるよね。閉ざされた孤島、過去から続く名家の壮絶な秘密とかいったノリがなんとも、そんな感じ！」

「たしかに、ドロドロで淫靡な部分も、通じるものあるよね」

俺は頷きながら、席を立つ。彼女もそれに続く。

「でも、ヒロインがいいよね！ 強烈で。あの容赦なさがなかなか！」

嬉しそうな顔で、入り口に張られた映画のポスターの中央にいる女優の方に目をやる。

「今までになかった、ヒロインだよね。レイプしてきた相手を逆レイプって凄まじいよね。あそこまですると爽快だよ。シーンのにはグロいけど」

映画について、自然なやり取りが続く。

「でもさ、この映画の怖いところって、何で出てくる男性の殆どが大変なサド野郎って……スウェーデンの印象一気に変わるよね、変態天国なのかと……私結構懂れていた国なのに、旅行する気がやや失せたよ」

眉をよせて参ったというように言う彼女の言葉に、思わず笑ってしまう。

「あんなに、スウェーデンがサド天国だとはね。ほら北欧って夜が長いから、その分変態が多いとか」

ニヤニヤした俺の顔を、チラっとみて「ん？」という顔をする。

「かもね。って、何言わせるの！」

可愛く睨んでくるが、すぐいつもの笑顔になる。

ノってツツコミいれてくる所も、楽しい。かなりハードな内容の映画を観るだけあってエロ方面の話も、意外に大丈夫だし。変に気を遣わなく色んな事が素直に楽しめる。また映画を観てシーンシーンで様々な表情を素直に見せる彼女の反応が可愛い。映画の後、思わずニヤニヤ笑って見ている俺の視線の中で、涙を恥ずかしそう

に拭く月ちゃんの表情なんて最高である。見ていた映画以上に俺をドキドキさせる。

本当に最高のペアだと思っていた。後になって考えてみたら、俺にとってこの時期くらいまでの彼女との関係が、幸せの絶頂だったように思う。

一人でどんどん盛り上がり、そのまま二人で幸せな未来を掴めると信じていた。けどそうは簡単にいかないのが、『月見里百合子』という女性だった。俺の常識がまったく通じない相手であることをすぐに知る事になる。

彼女は最高（後書き）

【彼女は最高】 1996米

She's the One

監督 製作 脚本…エドワード・バーンズ

この二人が観に行ったとされている映画は『ミレニアム ドラゴン・タトゥーの女』です。世界中で大ベストセラーとなった、ステイグ・ラーソン原作の傑作ミステリー3部作を映画化した話題作の一作目となる作品です。

ノオミ・ラパス演じるヒロイン、リズベットがなかなか良い味だしています。

やられたら、キッチリ同じだけの屈辱を相手に与えて復讐する、その姿勢が凄い！

六月の夜

季節は移り、ジメジメとした日本らしい季節に入った頃から、俺は何かオカシイと感じ始めていた。日が進むにつれ、纏わりつくような湿気と俺の中の不安と焦りが増してくる。

面接で出会い、そして同じ会社に勤め同じフロアで仕事することになる。そして映画を共に楽しみ関係を深め……。

コレが映画だったら、恋愛フラグ立ちまくりの二人で、ベタだけどコレ以上ない最高のシチュエーションな筈。

しかし彼女の微笑む瞳、俺をワクワクさせてくれる言葉を発する唇、そういった所から、友情以上の感情を感知することが出来ない。俺に対して彼女はいつも楽しそうに朗らかな笑みを向けてくるが、それは彼女の禿げた上司に見せている顔と殆ど変わらないようにも見える。

こんなに楽しい時間を一緒に過ごし続けているのに、何故彼女の恋の炎は灯らない？ 今までの気に入った女の子だったら、とっくに恋愛関係になっているはず。

ブログを見ると、相変わらず、『星』の野郎がチヨロチヨロしている。彼女と俺と一緒に見た映画にもコメントつけてくる所が、何とも腹立たしい。そして二人は相変わらず仲のよいやり取りが続けている。俺と観た映画に対してのヤツのコメントに『星さんと、観たかった』といったコメントを返しているのをみて、俺は嫉妬を覚える。

コイツがいるから、彼女はコチラを見てくれない。『星』という人物のコメントを読みながら怒りが込み上げてくる。おまけに映画を観たあと、彼女が『星』の野郎が言いそうな事を言ってくるのが

さらに腹立たしい、思わずその意見に大人気なく反論を試みてしまう。そんな時に、彼女が見せるチョット傷ついた顔が尚更俺を落ち込ませる。

此所で、彼女に自分の想いを伝えて、そこから新しい関係を築いていくという選択枝も確かにあったとは思う。でも俺は今まで、相手が自分を好きだと確信した相手にしか告白したことなかったので、振られる事にまったく慣れてない。

しかも、告白し関係を一度壊した後に、本当に新しい関係を再構築出来るという自信もまったくない。この『星』というヤツのようにオカシクなった後でも、このような親しみのある態度を示してくれるものなのだろうか？

冒険をするにはリスクが多すぎる。

俺は、そういったイライラを解消するために、会社の飲み会に積極的に参加することにした。

実際、大騒ぎして酒を飲むのは楽しかったし、それによって、他の営業のメンバーや、現場の人ともより仲良くなり、仕事も円滑に進むようになるというのも皮肉な結果である。

そんな飲み会の帰り、俺はスッキリできあがっている。ややフラつきながらも電車に乗ったとき、先程まで一緒に飲んでいた井口が走り込んでくる。

「間に合った」

彼女もすっかりできあがっているようで、俺の顔をみる目がトロンとしている。未成年なのに、いいのか？　こんなに酔っぱらって。

「黒くんの為、一生懸命追いかけてきたんだ」

エヘへと笑いながら、腕に可愛く抱きついてくる。彼女のグラマ
ーな胸の感触が腕に心地よい。俺はついオヤジな笑いを浮かべてし
まう。

他愛ないどうでもいい話題を、一生懸命俺に話しかけてくる様子
がなんとも可愛い。

井口は乗り換える予定の一つ前の駅にきた時、ふとヘラヘラが顔
から消える。

「ねえ、黒くんって彼女いるの？」

この子は、年下のくせに他の同期のように俺を『くん』付けで呼
んでくる。

「いや、居ないけど、なんで？」

すると、井口は無邪気な嬉しそうな顔をする。その目に俺への愛
と甘えを感じる。

「なら、私と付き合おうよ！」

思わぬ所に、フラグは立っていたようだ。俺はしばらく考え、ニ
コリと彼女に笑い返す。

「いいね！」

井口の瞳がパツと輝く。そしてニツカリと満面の笑みを浮かべる。
そして、俺と井口成実は恋人同士となった。

若い時代は短い、片思いなんかにウダウダ時間をかまけている暇
なんてない。

しかも、こんなに可愛い子が自分を想ってくれている。それを断

る馬鹿は何処にいるだろうか？ 手の届かない所にいる女性よりも、もっと身近にいる女性と楽しく恋すべきである。俺はそう自分に言い聞かせた。

六月の夜（後書き）

【六月の夜】 1940 スウェーデン J u n i n a t t e n
監督 脚本・・ペール・リンドベリイ

月曜日に乾杯！

夏を前に、俺の生活は一気に華やかなものになった。やはり彼女のいる生活というのはいいいものだ。心に潤いを与え、日々が一気に楽しくなる。

井口は子供っぽい所はあるものの、全身で俺への愛情を示してくれるところが何ともいえず可愛い。

また、子供っぽく俺を頼り、甘えてくる様子もまた良い。弱さを一切みせることのない月ちゃんとは大違いである。また小柄で細い彼女とは違って、井口はDカップでそこも良い！

「うわー凄い美味しそう！ あっくんって、料理も出来るんだ！」

料理といえるのかどうか分からないが、俺が作ったチャーハンを見て目を輝かせる井口。金曜日の夜から、部屋に泊まりにきていた井口は、今俺のTシャツをダボっと着て部屋でくつろいでいる。その様子がなんともエロくて可愛い。

「美味いかどうかは、保証できないけどな」

お腹すいていたのか、テーブルに置かれた途端にスプーンで食べ始めた。ニカッと井口はコチラに向かって笑い親指を立て行動でも美味しいと表現する。

「旨いよ！ サイコー」

こういう開けっぴろげで子供っぽい所と、グラマラスボディーでエロな所と、そのギャップが彼女をまた魅力的にしている。

思わず、その様子を愛しさと可愛さを感じ微笑んでしまう。

「良かった！ 所で今日何処デートいく？」

「んー、映画、なんか、ほら、大きな災害が起こって生き埋めになった人を助けるやつ。アレみたい」

映画というので、ヨシ！ と思ったが、その後の言葉にやや落胆する。その映画、ネットの映画ブログとか、シナリオも酷く映画館に金を捨てに行くような馬鹿映画と言われ酷評されていたものだ。

「それ、かなり微妙って噂だよ」

「え！ 私の友達みんな 絶賛しているよ！ だから大丈夫！」

結局彼女に押し切られ、その映画を見に行くことになった。しかしその内容は、ネットでの噂通り酷いものだった。まず関東を襲う未曾有の大災害が、えらく主人公にだけというか、物語に都合のよい被害を与えている。明かに銀座新橋辺りは壊滅状態だろ？ という状況だったはずなのに、新橋あたりにあるらしい災害対策本部とっているホテルは、電気から水道まで問題なく使えているようだ。唐突にいろんな事が起こるけど、それも主人公達に決定的な被害を与えず緩い危機感あたえるだけで終わっていく。そんな感じで脚本がかなり適当。主人公やその家族、なんでこんなにも頑丈なんだと呆れるほど皆、埋没しようが何かが上から降ってこようが助かる。俺は映画というより、ツツコミをすることの方で楽しんでた感じである。

隣では、井口は、デッカイ器に入ったポップコーンをザラザラと音を立てながら頬ばりながら「うほ！」 「すげー」とか言いながら夢中になって見ているようだ。いつもなら、そういった態度許せないのだが、今日はいかんせん映画も酷い、全てがどうでもよくなっ

た。

「超、面白かった！ 超感動だよね」

エンドロールに入った途端に、井口は目をキラキラさせ、エンディングテーマに負けないように大声でコチラに話しかけてくる。
俺は、その言葉に引きつった笑みしか返せなかった。

※ ※ ※

月曜日、あくびをしながら駅の改札をすると、前方に見慣れた小柄の女性の姿を見付ける。

駅から一步出た日だまりの中で嬉しそうに空を見上げているのは月ちゃんだ。人がそれぞれの目的に向かって動いて雑然としたこの空間において、背筋を伸ばして立っているその姿は、爽やかな朝の空気を感じさせた。俺は雑踏から抜け出しその、爽やかな空間へ誘われるようにその姿を追いかけて、肩を叩く。

「おはよ！ どうしたの？ 早いね」

そう、今日は少し早い、朝何かの当番で早くでないといけないという井口の為にモーニングコールを頼まれ、そのまま目が覚めてしまった為にいつもより早めに駅に到着していたのだ。

「おはよ！ 黒くんこそ、早いね、仕事？」

月ちゃんの状態は、俺に彼女が出来る前と後もまったく変わらなない。親しげな笑みで挨拶を返してくる。その様子に身勝手だが傷つ

いている俺。怒りも喜びも隠せない井口成実は、俺と付き合う事になった事を決定直後から社内で触れ回っていた。当然同期である月ちゃんにも嬉しそうに報告している。その現場に、うかつにも居合わせてしまったが、彼女は嫉妬どころか嬉しそうで、祝いの言葉すら発してきて暖かく応援してくれる始末。

「いや、チョット早く目が覚めちゃって」

俺一人が感じる勝手な疚しさのため、月ちゃんの前で井口の話題をしにくい。

「ふーん 私は毎朝、あそこで珈琲してから会社行っているんだ。だったら、黒くんも一緒に飲む？」

彼女は、駅前にあるコーヒーのチェーン店を指さす。

「いいね！ 行く行く！」

月ちゃんの誘いに、俺は飼い主に褒められた犬のように、嬉しさをさらけ出して答えてしまう。

そんな様子を彼女は面白そうに見る。

「そんな、喉渴いていたの？」

「もう、満員電車で大変だったからね」

俺は、本当の理由を隠すように、彼女の意見にのり、『ホント参ったよ』といった感じで言葉を続ける。井口にもなんか悪い気もしたけど、これは浮気じゃない、ただ同期と喫茶店で飲むだけだ、疚

しい行為ではない。『そうだろ?』と自分に言い訳をしながら、俺は月ちゃんと一緒に青に変わった横断歩道へと踏み出した。

月曜日に乾杯！（後書き）

【月曜日に乾杯！】2002 仏伊

Lund i matin

監督 脚本…オタール・イオセリアーニ

予期せぬ出来事

俺は、客先から原稿もらい、車に乗り込んだ時に携帯をチェックする。会社からの連絡メールに混じって井口からのメールが入っている。

『やつほ〜♪ あっくんの仕事、私が愛を込めてやつときました〜♪ 今日とは定時であがって職場のみんなで飲み会なんだ〜!』

彼女の声が、そのまま聞こえてくるようなメールに思わず笑ってしまう。

『サンキュー! まだ外だけど、帰ったら成美の愛を、しかと受け取っておくよ! アリガト』

メールを返し、会社に戻ることにする。

このあと、井口がやった版下をチェックして、製版出し、今日もらった原稿を現場に回せばいいだけだ。今日は久しぶりに早く帰れそうだ。一人で映画でも観るか。俺は早くも解放的な気分になり心躍らせていた。その後トンデモナイ事態が待っているとも、今の俺に分るはずもない。

「戻りました〜東和さんから無事全部の原稿もらえました」

俺は、元気に営業部に戻り、自分の席に戻る。俺の机には現場から上がってきた版下が置かれている。外に出歩いている事の多い営業では、現場にいった人が、他の人の上がった版下を全部一緒に引き上げ、このように受注者の机に配るのが決まり事になっている。

伝票の作業者の場所に、井口成実のサインとハートマークがつい

ている。俺はそれをみて苦笑しつつ、袋の中から版下を出して顔を引きつらせる。

「なんだ コレ！」

一目見ただけで分かる、とにかく雑なのだ。版下用台紙は、当たり用青のラインがひいてある、それに従って作ればここまで曲がりがまくったものになるとは思えないのに、眺めているだけで平行感覚がおかしくなる。

俺は電話を慌ててとり、現場に電話をする。すると製版部は誰だかの結婚祝いとか何かで、殆どが飲み会に出て、残っている一部の人は手一杯で、そんな事今言われても困ると言われる。確かに時間が定時をかなりまわっているものの、そちらがチャンと仕事しないからだろうと言いたくもなる。

「どうした？」

俺の電話のやり取りをみていた、他の営業部の人も集まり、俺は電話をかけながら、その版下を他の人に示す。皆、『コレは……』という顔をする。

そこに、営業制作課の井筒次長も騒ぎを聞き、やってくる。その版下をみて露骨に不快そうな顔をし、俺から電話を取り上げる。

「てめえのトコは、どんな教育しているんだ！ まともに作業も出来ないうえ、チェックもしないで回すのか！ あ？ 反論する前に仕事をチャンとしやがれ」

俺も相当、感情的な電話をしたものの、その井筒次長の言葉にチョット慌てる。今日中になんとか修正してもらわないと困るのだ。散々怒鳴り、電話を切ってしまった。

「おい、黒沢、作業伝票をコチラに回せ！　そして現場には、こんな仕事認められんと作業終了伝票をつつかえせ」

呆然としている俺を無視して、井筒次長は自分の課の方を向く。

「月見！　この版下コピーしてから、お前が直せ！」

仕事が終わわり、机の上を片づけていた月ちゃんは、名前を呼ばれ一瞬ビクつとする。すぐに笑顔で「はい！」と答えた。

あ、彼女も今日は久しぶりに早く帰れると喜んでいたのに……。井筒次長は、版下のコピーを受け取り、態々赤ペンでラインを引き、どこかどのくらい曲がっているか、何処が間違えているかを強調したものを俺の所に持ってきた。

「コレを伝票につければ、現場も何もいえないはずだし、証明になる」

この細かさが、現場から嫌われる要因なのだろうと思う。

月ちゃんを見ると、長めになってきた前髪を、星のついたピンで止め、ライトをつけ例の版下と原稿を交互にシゲシゲ見つめ作業を始めたようだ。

上司は、俺の肩をポン叩く。

「もう、これで問題はないだろ、井筒次長は仕事だけは確かだから、後で井筒次長と月見里さんにお礼いっとくんだぞ」

確かに、凄く助かったのは確か、でもなんか色んな意味で申しわけない。

ジッと見ている俺の視線に気付いたのか、月ちゃんはコチラに『任せて』といった感じで笑う。

「一時間もあれば、修正できるから、心配しないで！」

「缶コーヒーとか欲しいよな」 月もそう思わないか？」

ただ、彼女の前に座っていた、営業制作課の三池主任がニヤニヤとコチラ意味ありげに見る。

いつも笑えないオヤジギャグをいつてくるこのオッサン、でもこういう時には不思議とその緊迫感のない空気が助かる。缶コーヒーで手打ってやるから気にするなという意味だ。

「分かりました！ 買ってきますよ！ どんな味のモノがいいですか？」

「次長はブラック、主任は砂糖ミルクいり、係長はミルクのみだよ」

俺の質問に、三池主任の前から声が聞こえる。三時のお茶タイムに、いつも三人の為に飲みのも入れているから月ちゃんは上司の好みを知り尽くしているのだろう。

「いや、俺は麦味の泡の出るほうがいいな」

「仕事中です！」

メツといった感じで、月ちゃんは上司を叱る。そして、作業を再開する。

俺は邪魔しないように、近所のコンビニに缶コーヒーを買いに行った。オッサン三人には、普通の缶コーヒー、そして作業している

月ちゃんには珈琲ショップの名のついたチルドカップの珈琲と小さなチョコ菓子を買って帰る。

予期せぬ出来事（後書き）

【予期せぬ出来事】 1963 英

The V. I. P. s

監督…アンソニー・アスクイス

じゃじゃ馬ならし

営業に帰ると、あの酷かった版下がビックリするくらい綺麗に直
っていつている。

「これで、お前の版下を修正した俺らの苦労わかっただろ！」

「はいはい、すいませんでした、その節は。海より深く感謝して
いますから！」

「どこの海だ！ それ！ 瀬戸内海とか言わないだろうな」

仕事している月ちゃんをからかうように三池主任は声かけて、そ
れに楽しそうに答える彼女。

あれほど大変だと思っていたこの職場にも、すっかり彼女は溶け
込み、クセのあるオヤジらとも楽しそうにやっているようだ。

「ご面倒おかけしました、はい珈琲どうぞ」

営業製作課の皆に、お辞儀しながら缶コーヒーを配る。

月ちゃんの机にも、珈琲をチョコ置く。彼女はパッと顔を輝かせ
る。

「あ！ コレ、新商品の。しかもこのコーヒーも！ ありがとう！」

彼女が好きな味は、良くわかっている。彼女の心底嬉しそうな顔
に、俺まで嬉しくなる。やはりこの子の笑顔っていいなとつくづく
思う。

「いや、これくらいしか俺できないから」

「このチョコ おろそかには喰わぬぞ！」

神妙な顔で、チョコを掲げもって、映画『七人の侍』の台詞をもじった言葉をいう月ちゃんに、俺は思わず吹き出す。

「しゃべっている暇あれば、手動かせ」

井筒次長から、怒号が飛ぶ。

「はい！」 「はい！」

彼女に任せ、自分の仕事に戻ることにする。

こまごまとした作業を済ませ、本日の作業報告書を作成していると、目の端で月ちゃんが席から立ち上がるのが見えた。俺はイソイソとそちらへいく。井筒次長の机に置かれた版下をそつと後ろからみる。先程の酷さが嘘のようにそこには綺麗に整った版下があり、俺はチョット感動する。

しかし、井筒次長はフンと鼻で息をして、まず紙を横にして目で浅い角度で目視して確認し、透明のシートに細かいマス目のついたものを、その版下にあて、仰視する。

「ここ、チョット曲がっている！ 直せ」

『えええええ 何処が？』というレベルである。

しかし、月ちゃんは慣れたものなのか、『はい』と良い子の返事をして修正の為席に戻っていく。そして井筒次長の厳しいチェックを通過し、俺の仕事は無事すすめることができた。

※ ※ ※

井口が作業した俺の担当の仕事は、仕事自体は無事終わった。しかしこの件は、営業と現場の間にかんりの溝を作る事になる。俺の課と製造部とのの中では、そういった件があったので、今後は二度とこういった雑な作業をしないで欲しいといった強い要望という形で、済ませていたのだが、営業製作課の井筒次長がそれでは気がすまなかったようだ。

会議で、まず現場の教育体制が甘すぎると攻撃を始め、とんでもない仕事を見逃して完成品として出してくるチェック体制の杜撰さずさんを責める。それに対して現場は無茶な納期を設定してくる営業にも問題があると反論してくる。そしてバトル触発である。

その為に、課毎のポイント制度が作られ、それに加えクレーム伝票というのが作られ、それが流されるとポイントが減っていく、それによってそれぞれが抱えている不満といったものを表に出し意思疎通を円滑に計ろうというものである。

確かに、良いシステムのように思うが、コイツのここが気に入らないというのを互いにぶつけ合うだけの状態になり、社内に微妙な空気が流れるようになる。

『入稿が三十分遅れたのにヘラヘラっと笑って誤魔化した』というクレーム伝票をもらい、月ちゃんは苦笑していた。営業製作課に所属しているがために、現場からも攻撃をうけやすい。しかし、ソレはクレーム伝票を書くほどの事でもないだろうに。彼女の事だから、ちゃんと連絡も入れたはずだ。

「笑って誤魔化す、それが私十八番だったけど、だんだん通じなくなってきたね」

月ちゃんはおどけたように笑う。確かに彼女はどんなに腹立たしい時も、キツイ時も笑って乗り切ろうとする。今まで俺が心配で声を掛けても『大丈夫』といって笑う。多分泣きたいのだろうなという時でも。同期なのだし、友達なのだからもっと頼って欲しいと思うし、その状況がもどかしかった。

そして、その諸悪の根源となった井口はというと、相変わらずの仕事ぶりで営業、現場双方を騒がしている。

あの件も、俺も彼女に対してかなりキツく叱った。しかし彼女にはイマイチ事の重大さが通じず、むくれただけだった。井口の困ったところは、自分の失敗を認めず謝らない。彼女からしてみたら『仕方がないじゃん』ですんでしまうのだ。

俺が散々叱ったら、松ちゃんや月ちゃん等の同期に、俺が済んだ事でネチネチ文句言うと泣きつき慰めてもらおうとする。見かけとは違い甘い事を言わない河瀬さんは避けていくところは人を見ているというべきだろう。

この件に関しては、二人からお叱りの言葉を頂いたようで、俺にだけは謝ってきた。もっと他にも謝るべき相手はいると思うのだが……。

そして、俺は恋人として、コイツをキチンと教育してやらないと決意することになる。これは親心というものであって、彼女の為の行動だったが井口は、俺の前で文字通り頬を膨らませている。

「最近の、あつくん全然面白くない。説教ばかりだし！ そんなの二人でいるときにすることないじゃん」

「あのさ、お前がちゃんとすべき事をしないから、俺もいいたくなるんだろ」

俺は、怒りを乗り越して呆れてきてしまう。なんで通じないのだろう、彼女に社会人として責任感をもってもらいたいだけなのに。そして、だんだん男女の仲というより兄妹みたいな関係になっていく俺達。

クリスマスも無事楽しみ、それなりには仲良くはやっていたと思う。

春までもう少しという時期に、彼女から喫茶店に呼び出された。

彼女は、似合わない神妙な顔つきをしていた。

半年以上つきあった彼女、というか隠す事を一切しらない彼女の行動を見ていたから、言いたい事は察知していた。

「もっと好きな人出来た！ あっくんより包容力ある大人な人！」

この言葉より俺の社会人になって一つ目の恋愛は、終わった。

じゃじゃ馬ならし（後書き）

【じゃじゃ馬ならし】1967米伊

L a B i s b e t i c a d o m a t a

T h e T a m i n g o f t h e S h r e w

監督 脚本…フランコ・ゼフィレツリ

ファインダーの中の欲望

>i14605—1603<

春になった！ 例年よりも早めに咲き始めた桜は、四月一周目にもう満開で、狂ったように咲き、そして散っている。

春爛漫と咲き乱れ、桜吹雪が散る中、俺は、同じ課の先輩と元彼女である井口がイチャイチャと通勤していく光景を、苦笑しながら眺めていた。

流石に嫉妬に狂うとかそういったものを過ぎ去った関係になっただけで、動揺することもなかったけれど、社内恋愛ってこういう所辛いなと思う。

しかし、先輩の年齢は確か三十二、一週り以上違うのに、よくまあそこまでキャピキャピとしているなと感心すらしてしまう。それが包容力ある大人の行動なのだろうか？

そして、『月夜の映画館』のブログには相変わらず『星』のヤツがウロチョロしている。彼女の瞳に恋の色が灯らない。俺に対してだけでなく、他の人に対しても。俺はその事に落胆しつつも、ホッとしている。

俺はフリーになったことで、また堂々と月ちゃんを映画に誘い、彼女との時間を楽しんでいる。

月見里百合子に一番近い位置にいる男性は自分だと言い聞かせながら。

総務に交通費の請求書類を持っていくと、総務の深川主任と月見ちゃんが楽しそうに書類を見ながら談笑している。

「どう、月ちゃんの為に、今年は良いの、取り揃えたんだよ」

「なかなかカワイイ子ばかりですね」

「四大の子なら、年一緒だし、コイツなんて結構いいんじゃない」

「ですねーこの子はスポーツマンですか」

「どうやら、二人は今年の新人の履歴書を見ながら会話しているようだ。」

「何々、可愛い子います?」

俺も気になり、その会話に強引に割りこむことにする。可愛い子いるのかな? と思ったのと、映画が趣味とかいう野郎がいないかの不安もあったから。

「ダメダメ、個人情報だからコレ!」

しかし、深川主任はシッシと俺を追い払うようにする。

「なんで月ちゃんはいいのに、俺はダメなの?」

すると月ちゃんは、へへんと威張るような顔をする。

「私は社内報、編集員になったからねー記事の資料なの!」

結局彼女は望んでいたデザイン課への移動はなかった。そのかわり営業への移動の話もあったのだが、『無理です! 私人見知り激しいし、度胸ないので! とても勤まりません!』と言う言葉で、皆を絶句させ、結局は営業制作課に残ったらしい。

そしてデザイン課の萩上信子おきがみにスカウトされ、社内報編集要員となったらしい。ただでさえ、忙しいのに何でそんな面倒な事までするのか？ と俺は思うが彼女は嬉しそうだ。

印刷会社だけに、この社内報は客先にも会社の名刺代わりに使われているもので、その役割が大きいわりに、専門の課があるわけではなく、雄志によって編集されている状況。正直いって、あまり面白みはなく、やりがいがあるとは思えない。

「そうなんだ……」

「春号はニューカマー特集なの！ あっ二年目の人にも今度原稿お願いと取材にいくから、宜しく！」

月ちゃんはニコっと笑う。

「オッケー」

顔立ち自体は、そんなに華やかな要素ないのに何故か、彼女が笑うと場はなんとも明るくなり和む。

この笑顔に断れる人はいないだろう。なるほど社内報編集の仕事は彼女に向いているのかもしれない。

それから、社内で月ちゃんが小さい身体で、バカでかいデジタル一眼をもって歩く姿を度々見掛けるようになる。会社の備品だと思ったら、それはなんと彼女の私物だと聞いてビックリした。

『ニコンはシャッター音がいいのよね』とウツトリ語る彼女を見て、別の方面でもマニアな事を知る。

「ん」 チョット左側の方を見て、もうバリバリ仕事できますって

顔して！ はい！」

俺はパソコンに向かって仕事している風を装いつつ、カメラ目線で笑ってみせる。

「コレでいい？」

そう言いながら、俺に今撮影した写真を見せてくれる。笑顔も自然で、自分で言うのも何だが人間臭い魅力も滲んでいて、なかなか良い感じ！

「なかなか凛々しくとれているじゃないか！ モデルが良いからかな」

「いやいや、写真の腕がいいかならね」

チッチという感じで、否定される。

「黒くんの写真も撮ったんだ！ 見せて」

同期の松ちゃんも近づいてきて、デジイチの液晶を覗く。

「ほう、まあまあかな」男前二割増しで、トレンディードラマの主人公の友人レベルにはなっているね」

「そういうなら、お前のも見せろよ！」

というと、松ちゃんはニヤリと不敵に笑う。

「見て、その美しさに驚くなよ！」

「え！ これ別人じゃん！ 何このライティングにも凝った写真は！」

液晶からは、彼女の席ではなく、窓際の席を借りて撮影されたその写真は 良い感じの陽光の中で爽やかに笑う松ちゃんの姿がある。さらに、デューダーをめくると、河瀬さんがまた、やや陰のある雰囲気ある良い感じに写っている写真が出てきて、さらにめくると井口は弾けんばかりの若々しい笑顔の写真が出てくる。どの写真もその人物の魅力を絶妙に切り出している。写真の方の才能もかなりの腕前なようだ。

「おおお、いいじゃん コレ社内で売れるよ！」

寄ってきた、他の営業ものぞき込んでその写真を褒める。

「売りません！」

松ちゃんが怒る！

「そういえばさ、月ちゃんの写真は？」

月ちゃんは困ったような顔になる。

「ただけど……」

「じゃ、世界が認めた巨匠黒沢が撮ってあげるよ！」

月ちゃんはブツと吹きながら、カメラを俺に手渡す。
しかしカメラを向けると彼女の笑顔が強ばる、撮るのは得意でも、

あまり撮られるのは好きではないようだ。一生懸命話しかけながら撮影したもの、撮れた写真はどれもイマイチだった。いつもの笑顔さえ浮かべてくれたらもっと可愛く撮れるのに凄く残念。

社内報の二年目の人間を特集した記事に、俺が撮影した月ちゃんの写真が載ったが、そこでは一人だけこちない笑顔を浮かべる彼女の写真がありなんとも悲しかった。本当は彼女の最高の笑顔を捕まえたかった。でも結果は彼女の魅力が全然表現されていない強張った顔の写真ができあがっただけ。俺はそのページを見て、少し落ち込む。

ファインダーの中の欲望（後書き）

【ファインダーの中の欲望】（未） 2007 フランス

UN HOMME PERDU

監督・脚本 ダニエル・アルビド

エレベーターを降りて左

今年の新人も配属辞令が下り、営業には二人の女の子は入ってくることになる。

キヨロつとした目が印象的な丸顔でポツチャリとした感じの西河実和と、顔立ちもハッキリした柔らかい癖毛がなんとも女の子らしい蜷川美香^{にながわ}。

残念な事に、ウチの課にきたのは可愛い蜷川ではなく、トロそうな西河。

一年で成長したとはいえ、自分はこの会社で最高の営業マンだと思うほど自惚れていないし、自分も一年前はかなり酷かった事も認識しているものの、西河は俺がイライラするほど仕事が出来なかった。出来ないというか自信がないのか、やることなすこと全てを怯えながらやっているという感じ。

いつも縋るような顔で指示をまち、頼んだ作業をやってもらってもすぐ手を止め、不安げにコチラを窺う。そんな怯えた顔をいつもされていると、俺が虐めているみたいだ。

西河は社内報の取材で接した事もあるのか、月ちゃんを慕っている。時々泣きながら仕事の相談しているようなのが気配で分かる。そういう所もさらに苛つかせる。俺達世代は、色々問題はあったものの、会社の人にバレルような所で泣くことなんて一切せずに頑張っていたものである。

つい、俺も月ちゃんに愚痴を漏らしてしまう。

「実和ちゃんはさ、ただ自信がないだけと思うの。だから黒くんが、良い所を見付けて褒めてあげること、自信を持てるようにしていけばいいかと思う。なんかね心理学の本にあったけど、女性は叱られるとメンタル面も否定された気になり落ち込むんだって。だから

ら最初に褒めを挟むと通じやすいらしいよ」

そういう月ちゃんのアドバイスをうけて、俺は忍耐強く西河の良い所を探し褒めて伸ばす手に切り替えることにする。

『仕事が丁寧で正確だね、ただもう少し全体の動きを見るともつといいと思う』

といった感じで接し方を変えると、彼女のビクビクした態度もだんだんなくなり、俺にも懐いてきた。仕事も遅いけれど、こなせるようになってきた。

月ちゃんから学んだ、この対話術は後輩育成のみではなく、様々な所で活用できるものと気付かされる。相手への非難だけを行うよりも、相手の良さを認めた上で意見するというスタンスで話題をしていくことで様々な事が面白いように円滑に進む。

俺は『出来る男』風な自分に酔い、ますます調子にのる。八方美人？ な性格にますます磨きがかかることになった。

客先から戻ってきた俺は、エレベーターを降り営業の部屋に戻ろうとしたとき、左の非常階段の所で蜷川が佇んでいるのが見えた。彼女は泣いていた。

俺は、缶ジュースを二つ買って、皆から見えない屋上に連れていき彼女の話を聞いてあげることにする。去年の俺達同様に悩みを抱えた蜷川。俺の時とは違って、今年の新人は同期同士でそこまで仲はよくないようで、それぞれが一人で悩みを抱え苦しんでいるようだ。

「君は凄いよ、頑張っているよ！ 俺なんて最初酷かったから」

先輩として、社会人になった時の苦悩や悩みは分かるだけに、俺は彼女の相談に度々のってあげることにした。真っ直ぐで真面目で

一生懸命で本当に良い子である。

「黒沢さんのアドバイス通りにやったら、作業がシンプルに進めるようになりました」

俺の言葉を一心に聞き、それをシッカリ生かして仕事をしていく彼女に、色々教えるのも楽しかった。

ジックリと作業をする同じ課の西河よりも、いろんな意味で勘もよく社会人としての生活に慣れるまでも早かった。そして会話は、仕事の事からプライベートの事をよく語り合うようになる。

二人の仲が深まるのも時間はそう掛からなかった。そして俺は蜷川から告白され、それを快諾する。そして交際がスタートした。

※ ※ ※

東和薬品それが俺の担当の企業。一年頑張った事で、それなりに営業としても信頼され、俺は新しい定期刊行物の仕事を受けることに成功する。

問題としては、その仕事はかなりタイトでシビアなスケジュールで進行すること。元彼女である井口という途轍もないハズレの仕事をしてくる現場に任すというのは不安がでかい。しかも現場と密な打ち合わせをする必要もあり、西河が使えるようになってきたとはいえ、俺の負担もかなり増えることになる。

そこで上司に相談した所、作業全般を営業製作課で担当してもらうという事になった。あそこなら場合によっては、直接お客様へと働きかけ営業として動いてもらえるし、近い所で作業を確認することが出来る。そしてその作業担当は月ちゃんがすることになり、俺はこの仕事が上手く行くことを確信し胸をなで下ろす。

月ちゃんは、まず仕事が早くて正確。何か問題が起こって俺とも

連絡つかない時でも、客先に直接あの明るく感じの良い対応で問い合わせをして、作業を進めてくれる。そして、その旨をキッチリメモなどで俺に伝えてくれる。仕事を一緒にするにも、最高の相棒だった。

「お待たせ！原稿もってきたよ」

俺は自分の席にいくよりも先に、月ちゃんの席へと直行する。

「いえ、全く待ってませんでした。また東和さんの仕事来ちゃったのね」

と言いつつ、笑顔で俺を迎えてくれる。

「まあまあ、宜しく！」

俺は打ち合わせをする為に、彼女の席の横にあった丸椅子を引き寄せ隣に座る。

彼女は、ヤレヤレとおどけたように肩をすくめ、今している作業の版下を、横にズラし俺がもってきた資料を受け取り、そこに置く。一番上にいれてあった、スケジュール表をみてから、壁に掛けられているカレンダーに目を向けて確認する。俺に向き直るが、その一瞬前に彼女の顔が何故か強張る。

「ん？　どうかした」

月ちゃんは珍しく苦笑といった感じの笑みを浮かべ『なんでもない』と言う。俺は彼女の『何でもない』『大丈夫』はそうでない事が多いのを知っていたはずなのに、その時は言葉通りに受け取ってしまった。

「で、東和さんはなんて？」

俺たちは、打ち合わせを再開する。

月ちゃんのこの時のオカシナ行動の意味を知るのは、もう少し先。
俺としては、彼女もいて私生活は充実、仕事面で最良の相棒である
月ちゃんと一緒に順調、俺は幸せを満喫していた。

エレベーターを降りて左（後書き）

【エレベーターを降りて左】1988 仏

A gauche en sortant de l'ascen
seur

監督…エドアル・モリナロ

おいしいコーヒーの真実

蜷川は、フワフワとした女の子らしい見た目そのままの、料理も上手く細かい気遣いの出来る子だった。かといって自分が無いわけではなく、芯はシッカリしていて仕事と真摯に向き合う凛々しい姿勢もまた、俺のツボに填る。

また、俺を尊敬の目で見ながら頼り、通勤とか、営業から本社へ移動の時など俺を追いかけてきてチョットした時間も俺と一緒にいたがる、そういう行動もまた可愛かった。

「明彦さん、今週末、何処いきますか？」

俺は、可愛く俺を見あげてくる彼女の様子に愛しさを感じ微笑む。

「そういえば、観たい映画があるんだ」

彼女の笑みがチョット強張る。俺は、今まで彼女と別れた理由の殆どが、映画ばかり観たがるという事が理由なのを思い出し、不味かったかな？ と一瞬思う。

「あ、他のほうがいい？」

恐る恐る様子を伺うと。蜷川はブルブル頭を横に振って、フワリとした笑顔を浮かべる。

「ううん！ 観たい！ 明彦さんが薦める映画っていつも面白いし」

俺は、その答えにホッとしつつも、再来週は他のデートらしいコースを選んだ方がよいなと密かに考える。彼女の望む所に行って思

いっそり付き合ってあげようと心に誓う。

※ ※ ※

喉が渴いたので、給湯室にいくと月ちゃんがミニドリッップ珈琲を煎れていた。何事にも拘りを見せる彼女は、職場で飲む珈琲もインスタントではなくこうやってミニドリッップを使って本格的な味を楽しんでいる。真剣な顔でお湯を落としている月見里百合子の様子をついニヤニヤしてみってしまう。

そんな俺の気配に気付き、彼女はどうかした？ といった顔でコチラを向く。

「旨そう！ 俺も飲みたいな」

つい甘え口調で、自分にも煎れてほしいとお願いしてしまう。いつもなら月ちゃんは仕方が無いな〜といった様子で棚から俺のカップを取り出して俺の分の珈琲を煎れてくれる。

しかし、今日の彼女はチョット困った顔をする。でもすぐいつもの笑みに戻って、彼女は冷蔵庫からドリッップ包みを取り出し、それを俺にハイっと渡す。

あれ？ っと思いつながら、軽くショックをうける俺。

「明彦さん、珈琲ですか？」

後ろから蜷川の声がする。月ちゃんは『お先に！』と俺と蜷川に声をかけてサッサと出て行ってしまった。

蜷川は俺の手からドリッップ珈琲の包みを取り、俺のマグカップを棚から出し代わりに珈琲を煎れてくれた。

「いいですね、こういうのって、私今度二人の為に珈琲買ってきま

すから、それ飲んでいきましょ

う」

蜷川美香はニッコリ笑って、俺にマグカップを渡した。

なんだろう、蜷川の笑みがチョット怖い。

それ以降、俺の珈琲は自分で煎れるか、蜷川が煎れてくれるものしか飲めなくなった。

月ちゃんは俺が甘えても珈琲を煎れてくれることはない、なんかよそよそしい。もしかして今度はチョット嫉妬とかしてくれているのだろうか？ そんな考えが頭に浮かび不覚にもニヤリとしてしまった。それが大きな勘違いと気付くまで、一週間ほど不謹慎な喜びを噛みしめていた。

おいしいコーヒーの真実（後書き）

【おいしいコーヒーの真実】 2006 英・米

Black Gold

監督…マーク・フランシス、ニック・フランシス

疑惑の影

俺は製造部へ行き現場責任者の中島主任に原稿を渡す。部屋の奥で井口は一生懸命という感じで仕事をしている。一生懸命やっていることはやっているけど、内容が伴っていないのがあの子の残念な所。付き合っていた時は、彼女は俺が踏み入れると必ず満面の笑みを浮かべコチラに手をふってきて、俺も彼女に応えていた。でも今は無視するわけではないが、会ったら挨拶くらいはする知人の付き合い、余計な接触はしてない。それは彼女を厭うての事ではなく、それが別れた相手への礼儀だからだ。

別れた彼女に対して、男がやってはいけない事は、前の彼女に対して無駄に優しさとか未練といった感情を見せる事。相手に想いが残っていたら残酷過ぎる行為だし、想いが残っていなかったら重荷になるだけ。どちらにとっても良い事ではない。

だけど、月ちゃんの元彼の『星』というヤツはその事をまったく分かってない。どういう別れ方をしたかは知らない。でも明かに互いに未練を残して別れた。ブログのコメント欄で、互いの存在を確認することで、自分の中で薄れようとしている相手の姿を上書きしているようにうだ。コメント欄で、愛を今尚、想いを交し合っている二人。愛しているなら、手放さないか、綺麗に別れるかするべきだ。

そんな事考えながら、営業のあるビルに戻るために歩いていると、前からデザイン課の荻上信子^{おぎがみ}が歩いてくる。つり上がった目と眉と薄い唇で、美人な部類かもしれないけど俺のタイプではない。性格のキツサが前面に出ている所があり、やや近寄りがたい所がある。月ちゃんは何故か慕っていて懐いているようだ。俺にはしない顔で甘えたり頼ったりしているのも俺からしては面白くない所。猫を連想させるキツめの目が俺の方を見てジロリと睨んでくる。今日は輪

をかけて怖い顔だ。

「あんたさ、前もそうだったけど、彼女の教育ちゃんとしなさいよ！」

すれ違い際に、よく分からない事で怒られてしまう。言いたい事は言って去っていく荻上さんを慌てて追いかける。

「チョット、どういうことですか？　彼女は怒られるような事何もしてないはずですが」

「そうね、アンタが悪いというべきよね。ドンファン気取りで誰にも彼にもいい顔して。いい？　彼女持ちの男が絶対やってはいけないこと知ってる？　彼女以外の女性をやたら気にしてヘラヘラすること！」

俺はその言葉に、ムツとする。プライベートと仕事は俺なりにチヤンと分けているし、そこまでアチラコチラに無節操に愛想振りまいているつもりはない。俺が反論しようとすると荻上さんは怒りに燃えたギラギラした目で睨み付けてくる。

その気迫に何も言えなくなる。呆然としている俺を置いて、さっさと荻上さんは去ってしまった。

※ ※ ※

釈然としない気分のまま、俺は仕事に戻る。そして月ちゃんだけでなく、もう一人俺への態度がおかしくなった人物がいることに気がついた。

同期の河瀬さんだ。元々愛想の良いほうではないが、俺への態度が明らかに硬化している。

以前は他の人のように『黒くん』と呼んでいたはずなのに『黒沢さん』になっていた。綺麗な顔だけに、コチラを拒絶する顔に妙に迫力がある。

おまけに、最近営業の周りの人間も、俺に含みのある笑みを向けてくる。

何が起こった？

俺は、気持ち悪い空気の中仕事をして、いつも以上に疲れを感じる。二時間ほどの残業を終え、帰るためにエレベーターのボタンを押し、ため息をつく。

「お疲れさま！」

肩を叩かれ振り向くと、同期の松ちゃんが日に焼けた顔がニコリと笑っていた。いつもと変わらない彼女の笑みになんかホッとする。

「あら、一人？ 彼女、今日はいないんだ」

俺は苦笑する。いくら恋人だとはいえ、どんな時でも一緒にいるわけじゃない。

「先に帰ったよ。今日は彼女定時であがれたから、ショッピングするって言っていた」

『なるほど』と松ちゃんは、頷く。そしてニコリと笑う。

「だったら、久しぶりに飲まない？」

「いいね！ 俺もチョット飲みたい気分」

「でしょうね！ 付き合うよ」

彼女は肩を叩いて、開いたエレベーターにのり、手招きする。笑いながら俺は彼女の後を追う。

疑惑の影（後書き）

【疑惑の影】 1943 米

S h a d o w o f a D o u b t
監督…アルフレッド・ヒッチコック

女ともだち

入社当時はよく同期で飲みに行っていたものの、一年もたつと付き合いも広がり、同期だけで飲みにいくなんてことは、殆どなくなっていた。

俺が井口と別れたことも、理由として大きいが……。

俺と松ちゃんは社内であっているから久しぶりという訳ではないが、他愛ない最近のそれぞれの状況などを話しながらのんびりと楽しんだ。

直接仕事でも関係ないものの、互いの状況はほどほどに見えている、上下の関係もない、その程よい距離感が気楽で気持ちの良いお酒の席にしていた。

「それにしても松ちゃんも、強くなったよな。もうスツカリ、バリバリなキャリアウーマンだよな！」

松ちゃんは『でしょ?』といっておどけてみせる。そしてチョツト考えるような顔した後、覚悟決めたかのように顔を引き締めて俺の顔をジツとみる。

「あのさ、今日飲みに誘ったのはさ、同期としてチョツト言っておいたほうがよいと思ったからなの」

松ちゃんの言葉から、やはり俺の周りで何か問題が起こっていることを理解する。俺は姿勢を正す。

「人の恋愛をどうこういう趣味はないし、陰口みたいなことも嫌い

だから、最近私が見たことだけを話すね」

無言で頷き、先を促す。

「最近の蜷川さんの、言動に、皆もどう対応すべきか困っている状況なの」

「え？」

俺は思わず驚きの声を上げる。蜷川は、どちらかというと大人しめで、そんな問題行動するタイプではない。

「でね、今週の月曜日に、河瀬さんがとうとうキレで、蜷川さんと口論になって大変だったの」

ますます、状況が分からない。穏やかで大人しい蜷川と、あのどんな時も冷静な河瀬さんが喧嘩？

「え！　なんで、その二人が？」

大体において、その二人は仕事での繋がりもないし、営業部フロアで仕事している以外の接点はない。

「蜷川さんの月ちゃんへの、感情的な態度があまりにも度を超していたから。私も正直いうと、むかついてたから、彼女が先にキレなかったら私がキレていたと思う」

松ちゃんが眉を顰めている言葉に、俺は混乱していた。彼女の言葉から出てくる人物同士の関係性がまったくみえないのだ。

「チョットまって、美香が何をしたというんだ？ そんな 二人がキレルような事って！」

松ちゃんは、まったく状況が飲み込めてない俺をみて、深いため息をつく。

「ずっと、月ちゃんへの個人攻撃が凄くて。小姑なみに嫌味いったり、現場に有ること無い事月ちゃんの悪い話を流がしたり、チョット酷かった」

松ちゃんはサバサバしていて、陰口とか言うような事はしない人物。だから彼女が言っている事は真実なのだろう。

「あの、なんで 美香が月ちゃんに？」

ジロっと、松ちゃんは俺を見る。

「それを貴方が言う？」

「俺の所為だっていうのか？」

松ちゃんは困ったといった感じで、頭を横にふる。

「チョット聞いていい？ 黒くんって、どちらが好きなの？ 蜷川さん？ 月ちゃん？」

俺は、その問いかけに、言葉がすぐ出てこなかった。蜷川は愛しているのは確か。でも心の底ですっと気に掛かっているのは？？。

「蜷川さんは、黒くんの気持ちだが、月ちゃんにあるんじゃないかと

疑っていると思う。だからこそ月ちゃんを攻撃している」

その言葉に俺は、深い慚愧の念に駆られた。でもそれは誰に対して？ 蜷川に？ 月ちゃんに？ はたまた不快な思いをさせた河瀬さんや松ちゃんらに？

「黒くんの気持ちがどうであれ、その事キチンと蜷川さんに伝えてあげて。でないと、訳も分からず蜷川さんから攻撃うけている月ちゃんが可哀想だよ。不安の中どんどん孤立していく蜷川さんもの為にもね」

俺は、その言葉に何も言葉を返す事も出来ず、頷くことしかできなかった。いかに自分が自己中心だったかを思い知らされた。

蜷川を恋人としてちゃんと愛しているのは本当。月ちゃんへ残している未練とか思いが小さくもなく、一番自分が傷つかず楽しくいれる距離感を作りご満悦でいた自分。それを彼女である蜷川に見透かされていたなんて思いもしてなかった。

「こういうのは、周りの人間がどうこう言うことじゃないから、当事者でちゃんと解決してね！」

そして太陽のようにニカッと明るく笑う松ちゃん。叱りも責めもしない、彼女の気持ちが嬉しい反面、俺には堪えるものがあつた。

「ありがとう」

俺はただそんな彼女に、一言のお礼しか返せなかった。

この話はコレで終わりとばかりに、当たり障りのない関係ない話を始める松ちゃん。同じ年のはずの彼女がとても大人に思えた。

こんな狡い最低の俺を、彼女は暖かい友情で見守ってくれている。

シツカリしなければ、自分に言い聞かせる。

女ともだち（後書き）

【女ともだち】 1955 伊

監督…ミケランジェロ・アントニオーニ

長く熱い夜

昨晚は、蜷川からのメールに対して、結局俺は当たり障りのないいつものノリのメールを返した。自分が何をすべきか、どう動くのが最良なのかが判断できなかったからだ。

俺は今日、色々客先周りが忙しく、結局会社に戻れたのはすっかり日が暮れてからだだった。俺は部屋に入るとデスクで仕事していた蜷川がコチラに可愛い笑顔をむけてくる。ここまではいつも俺が知っていた世界のまま。

俺も彼女に笑顔を返し、まず自分の席にいき、余計な荷物を置いて、東和薬品さんからもらった原稿をもって月ちゃんの席へと向かう。俺が近づいてくるのを察知して、月ちゃんは前よりも若干硬い笑顔で俺を迎える。

表面上はいつもの通り仕事の話をしてはいるが、俺の心には昨日松ちゃんから聞いた言葉がひっかっていた。申し訳なさから月ちゃんの顔もまともに見られない。俺は資料を真剣に確認している彼女の前髪を留めているピンをジッと眺めていた。そのピンには先にも月と星がついた細い短いチェーンがついている。彼女が頭を動かすたびにチェーンの先の星と月がゆれる。何度もぶつかり触れ合う月と星。

俺は目を反らす。そして窓の方に視線を巡らせたときに気付いてしまった。蜷川がどんな表情で月ちゃんを見つめ続けていたのかを外が暗くなったことで鏡のように室内を写すガラス窓に映っていたのは、俺が今まで見た事のないほど狂気に満ちた女の顔だった。

その表情を見て胸を締め付けられるような痛みを覚えた。あんなに真っ直ぐで純粋な彼女を追い詰めて、そのような表情をさせてしまっているのは俺の所為なのだ。俺は、自分が許せなくなった。

週末、蜷川を部屋に招く。人のいない所で二人っきりで、ちゃんと向き合わないとダメだと思ったから。

俺と二人だけにいるときの、蜷川はとても幸せそうだ。『そんな事まで、しなくても良いのに』と言っても俺の綺麗とはいえない部屋を掃除し、嬉しそうに洗濯物を干している。

でも、悩みながら彼女を見つめている俺に対して、時々怯えたような目をするが、その事には

何も触れず他愛ない会話をしようとしている。

「美香、珈琲いれたけど飲む？ 疲れただろ？」

彼女の作業が一段落ついたのを見計らって、俺は珈琲を煎れてテーブルにおき彼女を誘う。

軽いウェーブの掛かった髪を揺らして、嬉しそうに頷く。

「嬉しい、有難う！」

俺の隣に座り、マグカップを両手で持ちその暖かさを楽しんでいるようだ。

「あのさ、美香……」

彼女の肩がビクッと震える。

「俺って、美香からみて、そんなに信用ない？」

我ながら狡い話の持っていき方に、自己嫌悪する。

「え？　　どういうこと？」

蜷川の大きい目が、不安げに揺れている。それでも健気に笑顔を
作ろうとしている。

「俺は、恋人がいながら、他の人に手を出すなんて事はしないよ、
好きなのは美香だけだ」

蜷川は俺の顔をジッと穴が開くほど見つめてくる。その瞳は月野
里百合子へ向けていたものとは、また違ったギラギラとした激しさを
帯びている。蜷川は何も言わずにうつむいてしまう。

「……だったら、……ないで」

その言葉はつぶやくような声だったので、よく聞こえなかったが、
言いたい事は伝わってきた。

「見ているのは、美香だけだよ」

彼女はその言葉に、顔を上げキッと睨むように俺を見てきたが何
も言わなかった。言っている俺が嘘だと認識している、探り探り言
っている言葉に真実味があるわけもない。

蜷川は何も言わず俺に抱きついてきた。そして痛い程俺を抱きし
める。俺も彼女を同じように、抱きしめる。しばらく無言で抱きし
めあった俺たちはキスをする。この時のキスがなんとも苦かったの
は、珈琲を飲んだ後だからというわけではないだろう。

俺たちは、空しい言葉を重ねるのを避ける為だけに、ひたすら抱
き合った。

これまでに、これ程濃密な時間を過ごした女性って他にはいないだろう。ただ互いの存在を刻み付けあう事だけが目的の、激しいものの芯が冷え切った熱さのない奇妙な時間。

気が付けば、日も暮れて真っ暗になった部屋の中、腕の中の彼女がもぞもぞと動くのを感じた。

「……晩御飯つくるね、まってね」

蜷川美香は乱れた衣類を直しながら、俺から離れていった。

長く熱い夜（後書き）

【長く熱い夜】1958 米

The Long, Hot Summer
監督…マーティン・リット

星に想いを

毎年毎年、異常気象だと言われてくると、というのが普通の気候だったのかだんたん思い出せなくなってくる。

異様に雨の多い梅雨を終えて、熱中症による死者もたくさん出した猛暑の夏も終わり、ようやく人がマトモに過ごせる秋となった。

俺と蜷川がどうなったかというところ、表面上はこれ以上なく穏やかで良い関係だ。俺は、今までの彼女に対して言ったことない『愛している』という言葉が彼女に何度も告げ、彼女はそれを嬉しそうに聞く。

何で、日本人はこの言葉をあまり口にしないのか、なんか判った。美しく素敵な言葉な筈なのに、日常生活の中で使うとこれほど、薄っぺらに聞こえる言葉はない。言えと言えど、嘘っぽく聞こえてくる。愛しているフリをする俺と、そんな俺に辛そうな目をしながらなのに笑顔で応える彼女。馬鹿な関係だとは思いつつ、最低な男になりたくないという俺のくだらないプライドがこの奇妙な関係を継続させている。

台所で、食器を洗っている蜷川の気配を感じつつ、俺はパソコンに向かってる。

月ちゃんは、蜷川に気を遣って俺と距離を置くようになった。俺も蜷川を傷つけないために、仕事の上での会話だけをするようになり、あんなに近かったと思って居た存在が遠くになっていた。

月ちゃんは西河と最近では映画を観に行っているようで、二人で楽しそうに映画の話をしている。俺は参加することも出来ず俺はただその会話を聞いている。西河は月ちゃんに思慕の念を抱いているようだ。彼女の観た映画、読んだ本を片っ端から追いかけて、ブログにも『ミワ』の名で頻繁に登場するようになってる。しゃべり方、

笑い方まで無意識に真似しだしているようにも感じる。西河にとつて、社会人の最高の見本が俺ではなく月ちゃんだったということだろう。だから彼女は同じ課である俺よりも月ちゃんに付き従う。

ブログといたら、『星』の名のコメントもまだまだ健在。

最低だと思っていた『星』の野郎だけど、好きな相手に変わらず好きだと真っ直ぐ示してくるコイツと、楽な方、楽な方へと逃げて自分にも恋人にも誰に対して誤魔化して生きている俺とどちらが最低？ 間違いなく俺の方だろう。

月ちゃんが惚れた、この『星』ってヤツはどんな男なのだろうか？ 俺よりも格好いい？ 包容力があるのか？ どんな顔なのだろう？ と思いながらブログを見ていると、思わぬところにその答があった事に気がつく。

『月夜の映画館』のリンク欄、友達のブログや映画ブログに混じって、明かに不自然なリンク先がある。岩手県花巻にあるらしい旅館『東雲荘』。俺はついクリックしたその先に『星』のヤツと対面する。

その旅館は星野という家族が経営しているらしく、そのホームページは若旦那『星野秀明』が管理しているようだ。サイトの所々に散りばめられたイラストは、明かに月見里百合子が描いたものだと分かった。館内を笑顔で案内する若旦那のイラストの惚けた味わいからして間違いはない。

トップページで従業員と一緒に旅館の前で笑っている『星野秀明』の顔を俺は、複雑な気持ちで見つめていた。顔からいうと大きくなつた、のび太くん？ という感じの眼鏡をかけたヒョロとした細身の男性。他の女性従業員と並んでいる様子からみても、背はそこまで高くないようだ。

「何みているの？」

後ろから蜷川の声に俺は、ギクリと身体を強張らす。彼女は俺が『月夜の映画館』のブログを見ていると酷く傷ついた顔になるからだ。

でも彼女は、ディスプレイを見て顔を輝かせる。

「岩手の旅館？　なんか素敵な感じの旅館！」

「……あ、そうだね……」

俺は、想定外の言葉に動揺する。彼女のあまりにも嬉しそうな期待に満ちた顔から、ガツカリとさせそうな言葉も言えず、俺はただ彼女の様子を眺めることしかできない。

「旅行かゝ素敵！　ここで一泊して岩手を散策するのね！」

（え……ココに？）

「…………でも、岩手でいいの？　他に行きたいところとかない？」

「岩手ってロマンチックよね！」

いつになくキラキラと目を輝かせて喜ぶ彼女に、余計なことは言えなかった。

そして俺達は、星と幻想の郷、岩手県を旅することになる。

宿泊先は？？『東雲荘』、月ちゃんの元彼が経営する旅館。

俺は何しているのだろう？　いったい……。

星に想いを（後書き）

【星に想いを】 1994米

I.
Q.

監督 製作…フレッド・スケピシ

偶然の旅行者

青森県出身の俺だが、岩手県って同じ北国にありながら、山や空気がなんか自分の故郷とは違う、何かココにあるのを感じていた。なんだろうか？ 景色、空気すべてにドラマがあるような、そんな魅力が岩手県、花巻にはあった。森の繁り方、山の雰囲気全体的になんともホッコリした感じで、陰から架空の何か隠れているようなそんな錯覚を起こさせる。

こういう土地だから、幾人もの文豪が生まれたというのだろうか？ 蜷川も東京にいる時よりも表情も柔らかく、リラックスして旅行を楽しんでいるようだ。

二人でレンタカーに乗って花巻の観光を楽しむ。日常から離れた空間が、俺たちを穏やかに落ち着かせる。旅人としての時間をまったりと楽しんでいた。そんな感じで、時間もあっという間に過ぎ、旅館『東雲荘』についたのは六時ちょっと前だった。

出来る限り、行くのを遅くしたかったということもあり、旅館に對して失礼にならないギリギリの時間にチェックインしたからであるが。

笑顔で迎えてくれたのは、女将と女性従業員で、俺はホッとする。旅館も従業員もなんとも家庭的で良い雰囲気なのに、何だろうこの俺だけが感じる居心地の悪さ。ちよつと違うけど不倫旅行をしている男性ってこんな気持ちなのだろうか？

女将の花巻や旅館に対する説明を聞く蜷川の様子を、俺は見守るといったスタンスで二人の会話を聞いていた。

「お疲れでしょうに、どうされますか？ お茶とお菓子を用意しますか？ それともお夕飯の前に温泉を楽しんでもいいですよ」

「明彦さん どうします?」

俺は悩む、しかし、あまり旅館内をあまり出歩きたくないという気持ち先立つ。

「うーん、ちょっと喉渴いたし、まずは部屋でゆっくりしようか?」

蜷川は嬉しそうに頷き、その様子に女将が微笑ましそうに頷く。

「なら、お茶をご用意いたしますね」

頭を下げて、部屋から出て行った。

「やっぱり、素敵な旅館ね! あったかい感じで」

蜷川は、嬉しそうに部屋に視線を巡らせ話しかけてくる。

「そうだね……」

床の間に飾られている秋らしい植物が活けられた花瓶をシゲシゲ見つめる。そして無邪気な顔で赤い実をツンと突いている。その子供っぽい可愛らしい様子について笑ってしまう。

これが、この旅館でなかったら、俺ももっと心から楽しめたのだろうか、と俺は密かに思う。旅館自身は悪いわけではないのだが……。そうでなかったら、今頃温泉で最初の一風呂を満喫していたのかもしれない。

出来ることなら遭遇したくない、アイツに会わないですむようにと祈っていた。

※ ※ ※

旅館において若旦那は若旦那でなかなか忙しいものらしい。料理を部屋に運んできたのも、女性従業員で、俺の前に現れることはなかった。

別に会ったからどうなるというものではないが、俺は幾分安心し、二人で旅館らしい和の夕飯を楽しみ、温泉へと別れた。大きいわけではないけれど、風情のある岩風呂は気持ちよく、俺はそこで一気に緊張感を解く。すっかり機嫌よくなった俺は自分の部屋に戻る。すると小柄な男性が布団を敷いていたようだ。

何がそんなに楽しいのか、ニコニコとした顔で布団を敷くその男の姿に俺は固まる。

星野秀明だ……。

コチラの姿に気がつき、その男はニコリと人懐っこい笑みを浮かべる。

「お風呂入っている間にと、思ったのですがすいません、すぐ終わりますので」

「いえ、お気になさらずに、お風呂気持ちよかったです」

俺は動揺を出来る限り隠し、笑顔で答えると、男は嬉しそうに笑う。その顔に、一人の女性の顔がダブる。（なんで同じような顔で笑うのだ、コイツ）

「そうですか、何か飲み物もってこさせましょうか？」

「じゃあ、後でいいので、ビール飲みたいです」

無性にアルコールを摂取したい気分の俺……。

「かしこまりました、すぐ持ってこさせます」

チョット顔を傾け笑うその表情どころか、しぐさまでが月ちゃんに似ているって……。同調行動^{シンクロニティ}? なんか妙な気分になってくる。恋敵? と向き合っているというより、月ちゃんと向き合っているような錯覚をうける。顔は全然違うけど、笑い方や纏っている空気がなんか通じるものがある。

布団を敷き終わり、星野秀明が出て行って俺はようやく息をつく。気分を落ち着かせるように大きく深呼吸する。心臓がドキドキしている、なんで俺は、ここまで動揺している?

いきなり部屋のドアが開き、俺が「オワッ」と声だし驚く。

蜷川もそんな俺の驚き方に、ビクッと身体を震わせる。

「どうしたの? 明彦さん」

「いや、何でもない、チョット考え事していたから」

彼女の登場で、俺はさらに動揺する。なんで浮気現場を見られたような、疚しい気持ちになるのだろう? 俺は……。やはり、ここに来た事は間違えていたと後悔する。今悔いている最中^{さなか}だから後悔か、いや行く前から後悔していたか……。

偶然の旅行者（後書き）

【偶然の旅行者】 1988 米

The Accidental Tourist
監督 脚本…ローレンス・カスダン

月の輝く夜に

気分をスッキリさせるためと、蜷川とつまみを買いに外に出る。近所といってもちよつと歩いた先にあるコンビニへと足を伸ばす。肌寒いが、歩いているとその冷たい空気がかえって気持ちよかった。また繋いだ小さい手が温かく、心をなんか落ち着かせる。

旅館の明かりが見えてくる。玄関の前で、何やら作業していた人物がコチラに気付き、頭を下げる。悲しいことにもう小柄で細身のシルエットでもわかってしまう、星野秀明だ。

つい、俺は繋いでいた、手を放してしまう。

「おかえりなさい」

見ていて腹立たしくなるほど、なんとも和む笑顔をコチラにむけてくる。

「ただいま」

蜷川はその笑顔を、俺とは違って素直に受け取り笑顔を返す。

「東京と違って、ココは何もない所でしょ？ 夜も遊ぶ所はあまりなくて」

申し訳なさそうにな星野秀明の言葉に、蜷川は首を大きく横にふる。

「いえいえ、空気が綺麗だし気持ちいいです。それに星がビックリするくらい綺麗にみえて感動してました」

目をキラキラさせて語る蜷川に穏やかな笑みを返す星野秀明。

「確かにそれだけは、自慢ですね！ あ、でも今日は満月だから、星はチョット見づらいかも」

空で煌々と輝く月を見上げて星野秀明は目を細める。見上げると、まん丸なお月様が大きく輝いている。

「綺麗ですよ〜月も東京より綺麗に感じる！」

「ホントだ、月の兎模様までクッキリ見える」

月の表面に浮かぶ模様が俺の頭の中で、あの『月夜の映画館』の兎の姿に変わる。あの兎がコチラを見て、俺と星野秀明が並んで立っているのをみて首を傾げる。

馬鹿な妄想をしながら、他愛ない会話続ける俺と蜷川。

クスクスと穏やかな星野秀明の声が聞こえる。コチラを馬鹿にしているというのではなく、純粹にこの時間を楽しんでの事のようにだ。横目で星野秀明の様子を伺うと、俺達と一緒に静かに月をまだ見上げていた。その顔は笑みを浮かべていたけど、俺には酷く寂しげに見えた。その悲しげな笑みが、月ちゃんの顔に重なる。

「玉兎ですね、健気で一生懸命な兎さんの」

つぶやくような星野秀明の言葉に、俺も頷いてしまう。蜷川だけは、意味が分からなかったように首を傾げる。

「月の兎の、伝説知らない？」

その言葉に頷く彼女に俺は説明する。

昔食料もなくいきだおれている老人を猿、狐、兎の三匹が発見する、その三匹は力を合わせて老人を助けようと森を駆け巡る。猿は得意な木登りで木の実をとってきて、狐は川から魚を捕まえてきたけど、兎だけは頑張ったけど何の食料も用意する事ができなかった。それでも何とか老人を助けたいと思った兎は、猿と狐に頼んで自らを火にくべ肉となり老人へと差し出した。その兎が天に昇り月の兎となったという物語。

蜷川は、悲しそうな困ったような複雑な顔をする。

「そんな、兎があまりにも可哀想な話では？」

そこまで見知らぬ老人にする必要があるのか？　とも思えるこの物語、慈悲行の美談とされているが、確かに納得しにくいものはある。

星野秀明は何故かクスクスと楽しそうに俺達の会話を聞いている。

「いえ、私の友人と昔、この物語について面白い話をしたのを思い出して」

星野秀明に言葉に蜷川は『え？　どんな話ですが？』と興味深げに訊ねる。

「自分がその兎だったら、薪集めて、たき火つくってその老人の為に暖をつくって仲間を待つ。そして側について『大丈夫ですか？』もうすぐ飯きますから」と励まし続けるって。猿がとってきた木の実を老人が食べている間に、狐がとってきた魚をたき火で美味しく調理してあげる……らしい。『行き倒れしてたような老人に行き成り兎肉はハード過ぎてかえって身体に悪いよ！』とも言ってたか

な」

それ言ったのは、月ちゃんだと俺は直感する。彼女がいかに言いそうな事だ。

「そして、月にいったのも、地球で老人のように空腹で生き倒れている人を上空から見付ける為で、月からそんな人を見付けたら地上の猿と狐に連絡し、現地に向かわせて、自分はそんな時の為についたお餅を地上に投下すると……」

俺は思わず吹き出す。

「兎の国際救助隊 『サンダーバード』 ですか！」

俺は海外人形ドラマのサンダーバードしながら、月基地から地球を見守る兎の姿を想像する。

（いや、サンダーラビットか、サンダーでもないか、ムーンラビット？）

「でも、その方が素敵な物語ですよ。お餅ついている理由も納得ですし」

蜷川もクスクス笑っている。

星野秀明は、俺達が笑っているのをニコニコしながら見つめている。

コイツと月見里百合子が楽しそうに『玉兎』の話をしている様子を想像できた。なんか二人は同じ空気をもっている。まるで最初からセットだったみたいにお似合いなのだ。

「本当に、最高ですねよ彼女は」

つい、俺は星野秀明に向かって語りかけていた。

「え?」

目を丸くしてビックリしたよう俺を見る星野秀明。

「あ……あの……てっきり、兎の話したの貴方の彼女なんだと」

俺も、あまりにも不自然な言葉だったことに気がつき、動揺しながら、苦しい弁明をする。

「え、まあ……」

星野秀明は気まずそうに言葉を濁す。

「でも、まあ、昔の話ですけど」

そう話を続け寂しそうに笑う星野秀明の顔を、俺は見ないふりをした。

何しているんだろ、本当に。俺は視線を再び月に戻す。

月は、こんななんとも奇妙な三人をただ静かに照らしていた。

結局旅行中、俺は星野秀明と友情を深めるわけでもなく、ただの旅館の若旦那と客という関係内での会話だけをし、笑顔で旅館を後にした。

終わってみたら、悪くない時間を過ごせ、素敵な旅館だった。でも俺がココを再び訪れることはあるのだろうか? その時は、月見里百合子に対しての気持ちを解決出来た時だろう。それは月見里百合子に対して気持ちを整理し何ともなくなった時? それとも彼女

と向き合い恋愛出来た時？

電車の中で、俺の肩に頭を乗せて眠る蜷川美香の寝息を聞きながら、そんな取り留めもない事を考えていた。

月の輝く夜に (後書き)

月の輝く夜に 87米／コメディ

Monstruck

監督 製作…ノーマン・ジュイソン

脚本…ジョン・パトリック・シャンリー

八人の女たち

人は、季節や時期といったものに影響を受けやすい。それに合わせて生活していると安心するものだ。恋人作るなら、クリスマスまでに！ と行動するのと同様、次のステップである次年度が見えてくる一月から三月に別れを決意する人が多いようだ。

高校生から今まで（それ以前にも彼女と呼んだ人はいしたが、その付き合いは、恋愛というにはいろんな意味で可愛すぎるので）八人の女性とお付き合いしてきたが、七人の女性と年が変わり次学期が見え始めたこの時期に別れている。その内、一年以上お付き合いしたのは一人だけ。

そして俺は二月の半ば、俺は八人目の彼女である蜷川と映画を楽しみ、その後喫茶店にいる。

ロマンチックなラブコメディを観た後だというのに、彼女の表情はどこか虚ろで言葉も少ない。

彼女の本当の笑顔を見たのっていつの事だったのだろうか？ と俺は彼女との日々を回想する。岩手県での旅行中だけだったのかも知らない。それ以外の時は、良い彼女であろうと必死で笑顔を作っている、そんな感じだった。

俺は、今まで付き合い合ってきた彼女にとって、優しく面白い最高の彼氏だったと自負している。ただ相性の問題や、趣味の相違だけでお互いの何が悪いからというではなく別れてきた。浮気とか暴力で相手を傷つけたこともないし、そんな男最低なヤツだと思っている。だからこそ、蜷川に対しても俺は良き彼氏であろうと頑張り、彼女もそれに必死で付き合い合ってきた。でもそれも限界なようだ。

「黒沢さん、私ね」

『明彦さん』ではなく『黒沢さん』。彼女の中で俺の立ち位置がハッキリ変更になったようだ。俺は静かに頷く。俺の顔をみて寂しそうにチョット笑ってから下を向く。

「気になる人が出来たの」

彼女は、ジッとティーカップの中の琥珀色の液体を見つめている。

「そうか、分かった」

俺は静かに答える。俺の言葉に彼女は静かに顔を上げる。その瞳から涙がスツとながれる。

俺はハンカチを差し出すけど彼女は首を横にふり、バックから自分のハンカチを出し自分の涙をぬぐう。

「私……」

「今まで本当にありがとう……そしてゴメン」

彼女は、静かに涙流しながら、首を横にふる。

俺はそんな蜷川を静かに見守るしかできない。何を言ってやれる？
今この子に。

「私こそ、ありがとう……じゃあ もういくね。じゃあ、さようなら」

なんとか涙を止めた彼女は、真っ直ぐ俺をみて笑う。

そして、千円札をテーブルに置き、振り向きもせず去っていった。
。

俺は大きく深呼吸をし、カップに残っていた珈琲を、口に含む。いつも以上に珈琲が苦く感じた。

こうして、俺と蜷川は恋人から単なる同僚になった。

二ヶ月程して、彼女が同期の男性と楽しそうに歩いているのを見掛けた。相手の男性は可愛い蜷川にベタ惚れしている感じた。そんな相手の愛を一心に受けて蜷川美香も幸せそうだ。俺に向けていた笑顔とは違い、心の底から嬉しそうな笑みを返している。

その様子に俺は寂しさよりも、嬉しさを覚え、ホッと胸をなで下ろす。俺の彼女に対する罪悪感が少し軽くなった。

八人の女たち（後書き）

【8人の女たち】 2002 仏

8 femmes

監督…フランソワ・オゾン

昔みたい

> i 1 4 6 0 6 — 1 6 0 3 <

俺は蜷川と別れて一ヶ月、我ながら聖職者のような禁欲的とか色恋事に見向きもしない勤勉な生活をしていたと思う。

というか、蜷川との付き合いによって気付かされた自分の狡さ弱さに対して自己嫌悪に陥っており、精神的にも、恋とか愛とかいった事を考える気力もなくなっていた。ズルイ自分の思い出のありすぎる部屋も、なんか心地悪く、引越しました。でも心の切り替えがなかなか出来ない。

「あのさ、そんだけ落ち込むなら、今度こそ自分にも、月ちゃんともキッチンと向き合えばいいじゃない」

松ちゃんは呆れたように、俺にそんな言葉を投げかけてくる。

気がつけば、姉貴とダメ弟のような関係になっている俺達。サバサバしていて何でも話しやすい事もあり、月ちゃんの事、蜷川の事などについて、俺は彼女に何でも相談出来る関係になっていた。

彼女には、既に将来結婚を約束しているような恋人がいる事もあり、男女でありながら純粹に友情で話せる。彼女との時間はいろんな意味で楽しかった。逆にコチラに恋心がある分、月ちゃんとの会話のほうに悩む部分が多い所があった。しかも蜷川との件で若干距離が出来てしまったから尚更である。最近は映画友達という立場も、後輩である西河に奪われているようだ。二人が楽しそうに観てきた映画について話しているのに割り込んで会話を参加している状況。

「とりあえず、単なる同僚から、友人に戻れるように努力はしてい

ますよ」

俺はむくれたような口調で言いながら、ビールを煽る。

「今週末、彼やその友達と、荒川でバーベキューやるから、くる？
月ちゃんも誘うよ！」

「え！ この寒い中、バーベキュー？！」

三月といったら、春とは名ばかりでまだまだ寒い、物好きな……。

「チョット寒いからいいんじゃない！」

ニカッと笑う松ちゃん。アウトドアな人間は、季節なんて関係なく楽しめるらしい。

「ま、月ちゃん来たら、考えればいいよ！」

決定事項とばかりに、彼女は言い切る。正直あまり気乗りしなかったが、確かに一緒にバーベキューの準備とかすると、彼女との距離が少しは縮まるかもしれない。包丁を持って野菜とか切る彼女が、ちよっかい出す俺を笑いながら叱るといったシチュエーションが頭に浮かぶ。アルコールも入っていた事もあり、俺は馬鹿な妄想をしてヘラリと笑ってしまった。

※ ※ ※

次の日、二日酔いでぼんやりした頭をシャッキリさせるために、濃いインスタントコーヒーを飲むため給湯室に行く。そこは、まさに松ちゃんが月ちゃんを熱烈勧誘している現場だった。

「中島さんや、信子さんも来るんだ!」

「楽しそうだね」

松ちゃんは、俺の姿を見てニツカリ笑いながら、月ちゃんを必死で勧誘している。月ちゃんも俺の姿を認めニコッと笑いかけてくれる。ようやく元の友情状態まで復活できたかな? と俺はその笑顔を見て思う。

「月ちゃんも、バーベキューくるんだ!」

俺も態とらしく、会話に参加する。月ちゃんは「そうね」と言いながら、携帯を弄る。そしてスケジュールを確認しハツとした顔になる。

何気なく見えた液晶画面に俺は、土曜日に何やらマークがついているのを気付く。嫌な予感。

「あつ。ゴメンその日ダメだ! 同窓会があるのを忘れていた」

「そっか、残念! でも次の機会誘うから! じゃね!」

松ちゃんはこっちに『ゴメン』口の形だけで謝り、給湯室から出て行った。

「是非是非! 今度また誘ってね」

月ちゃんは松梨友子に手を振り、ふと俺の視線に気づいてか不思議そうにコチラをみる。

「黒くん、なんか痩せた？」

確かに色々あった事とで、適当な食事をするようになって痩せたかもしれない。というより窶^{やつ}れただけ？　でもそんな俺の変化に氣付いてもらえた事が嬉しい。

「まあ、色々忙しかったからね」

「ダメだよ！　一人暮らしなんだから、自分でチャンと管理しなければ！　情けないな」

自分のマグカップと俺のマグカップを棚から出しながら、説教じみた事を言ってくる。多分、こういう言葉の言い回しは、彼女が慕う荻上さんの影響。あえて説教臭い言葉遣いとか行動を真似しているところがある。しかし荻上信子のようなキツさ激しさが無い。他の女の子に言われたら五月蠅く感じる言葉も、月ちゃんの口から出ると、優しさと愛情を感じる。彼女の言葉が聞いている俺の心を温かくする。

「黒くんは、何飲むの？」

もしかして、煎れてくれるんだ！　何ヶ月ぶり？　こういうの。

「何でもいいよ、月ちゃんがいれてくれるものなら」

調子良い俺の言葉に、目を細め呆れたように見つめてくる。でも、「まあいいか」といって笑う

「草臥^{くたび}れきったジャパニーズサラリーマンに。とおきなモノ出してあげよう！」

そして、しゃがまないと取れない床に近い棚の下段から青いココアの箱を取り出す。給湯室のその下段の一部が月ちゃんコーナーとなっている（正確には、営業部製作課の飲み物コーナーなのだ）。そこには珍しい茶パックとか、ミニコーヒードリップとかが置かれていて、このフロアの人間に密かに注目されているスポットである。皆コッソリそこから飲み物を取り出し、そしてコッソリ替わりに何かを置いていくことで、品揃えは日に日に豊富になっている。

月ちゃんは、青い袋をシャカシャカ俺の前でふり、自慢げにニヤリと笑う。

「コレ、単なるSWISS MISSのココアと思わないでね！」

しかし、袋にはSWISS MISSという文字デカデカとついていて、パッケージにはココアの袋であることを記してある。何故か二つの袋を俺の前で振る。

「え、何が違うの？」

「SWISS MISS — Marshmallow Love
rs! マシュマロの分量が生半可じゃないの！」

ドヤ顔だけど何とも言えず可愛い。こういう顔をして憎たらしい感じにならないのが不思議だ。しかも俺は、マシュマロはともかく『Lovers』という単語に思わずニヤニヤしてしまう。

「なら、その月ちゃんの愛を頂くことにしようかな」

思わず、下らない事を言う俺に月ちゃんは、チョット冷たい目をする。

「この『L o v e r s』は恋人ではないよ、『愛好家』とか『狂い』の事、マシユマロ愛好家、まさに私の為にあるようなココアなの」

そう言いながら、一袋目で普通にココア作り、その上にもう一袋を開け白い小さなマシユマロをザラザラと載せる。コンモリとミニマシユマロ浮いたココアを俺の為にに入れてくれた。席に戻り、マグカップの上に邪魔なほどマシユマロが浮いたココアを俺は馬鹿みたいにニヤけて飲んでいたと思う。

ポケットの携帯が震える。松ちゃんからの、メールだった。

『バーベキューは残念だったね、でも月ちゃんに「最近黒くんが元気ないから、みんなで元気つけてあげないとね」と振っておいたの！ 私のナイスアシストに感謝せいよ！ ただ、あまり月ちゃんの前でヘラヘラしていたら、その言葉が嘘っぽくなるからニヤケ顔も程ほどに！』

なるほど、このココアは彼女なりの俺へのエールなのか。でも最高のエールだ。とてつもなく甘ったるいココアが俺にパワーを与え、元気してくれた。そして久しぶりに俺は幸福感に浸っていた。チヨット先に、脅威が迫っている事なんてまったく知らずに……。

昔みたい（後書き）

【昔みたい】 1980 米

Seems Like Old Times
監督…ジェイ・サンドリッチ

うるさい女たち

荒川のバーベキュー、月ちゃんが欠席の段階で、もう俺も行かなくて良いのかと思ったら、シツカリ頭数にいれられていたようだ。

松ちゃんの彼氏の大学時代のサークル仲間が中心で行われたバーベキューは旨かったが、いろんな意味で寒い。荻上さんと製版部の中島さん、松ちゃんとその彼氏のように、そこにいる女性全員が恋人もしくは旦那と一緒にあぶれているのは男だけ、というなんとも微妙な状況がますます俺の心まで風を吹かせ俺を冷やす。

しかもそのあぶれている野郎どもは、『一人フリーの女の子が来てくれるとか言ってた？』とかトンデモナイことを言っている。

「来てもあんたには渡さないよ。私が認めた男しか交際は許さないから」

荻上さんが、何故か俺の方までみてそんな事言ってくる。何ですか？ その父親的な宣言は。

お酒を渡しながら、荻上さんに冗談っぽく聞いてみる。

「じゃあ、この俺が月ちゃんの恋人として立候補したら、荻上さん反対するんですか？」

荻上さんはチョット悩んだようだが、意地悪な笑みを浮かべる。

「当たり前じゃん、アンタみたいな女癖の悪い男に、可愛い娘をやるわけないでしょう！」

この時は、『ひどいですよ、それは!』と戯けた感じで嘆いてみせたが、実はコレが社内にお

ける俺の一般的な評価だというのが、その後の生活でよく分かった。

※ ※ ※

俺は今度こそ心改めて、脇目もふらず月ちゃんと向き合おうと心に誓い、行動はしていた。それなりに社内で評判の良い月ちゃんが、社内恋愛をしないまでも、男性社員が積極的に近づいてこなかったのが良く分かった。

彼女の周りにはウザイ存在が多すぎる。

月ちゃんの誰に対しても裏表のない態度と明るい笑顔が、社内のオヤジにとってもモテる。正確に言う则可愛がられている。そりゃそうだろう、家でも会社でも煙たがれているようなオヤジが、こんな若い女の子に親愛に満ちた笑顔を向けられたら、愛しさも増すというものである。

そいつらが先日、荻上さんと似たような事を公言し、俺と彼女が話している最中でも『こんな、スケコマシなんかにはひっかるなよ!』という感じの事を月ちゃんに忠告してきたりする。

その言葉に月見ちゃんはいつも、クスクス笑いながら『大丈夫ですよ!』といった感じの言葉を答える。その『大丈夫』って、俺はそんな人間じゃないから『大丈夫』と言っているのか、俺なんかと付き合う気は全くないから『大丈夫』と言っているのか、そこは突き詰めて聞いてみたい所だ。

そういった、自称父親軍団に内心ゲンナリしながら、エレベーター待ちしていたら、荻上さんも本社へ用事があるようで隣に立つ。

そして俺を見て、ニヤリと笑う。この人は、睨んできても、笑いかけてきても俺にとって良い事があった試しがない。

「そういえばね月ちゃん」

唐突に話しかけてくる言葉に、俺は思わず彼女を注視する。

「今週末、なんかデートするみたいよ！」

「え！ 誰と？」

俺は、虐められるだけなので、あまり会話をしなくなかったけど、コレは聞き流すわけにもいかなかった。

荻上さんは肩をすくめ、開いたエレベーターにさっさと乗り込み、俺が乗ってないのに閉めようとしてくる。慌てて俺は閉まるドアを止め中に乗り込む。別に本気で閉め出すつもりはなく、俺の反応を見て楽しんでいるだけのようだ。

「さあ、なんか幼なじみとか言ってたかな？ 同窓会で意気投合して、とかいう感じじゃないの？」

「ふーん、彼女もとうとうそういう行動するようになったんだ」

『どうだ！ 傷ついただろ！』と言わんばかりの荻上さんの爛々さきとした目に、俺はあえて耐え平静を装う。彼女は猫のような目を細め、そんな俺の姿を見つめてくる。コチラの穏やかではない心の内はシッカリ見透かされているようだ。彼女は満足げに、俺を置いて颯爽と本社へと歩いていった。

俺は悶々とした週末を迎える。ブログを確認すると『デートした』

とされる土曜日に映画の感想記事がUPされたが、その文章からは映画以外の事についてはまったく語られていない。知りたい部分は何も俺には教えてくれなかった。

開け月曜日、珈琲を飲み、給湯室に立つ彼女の後をさりげなく追い、ご馳走になりに行く。

「週末何か映画観た？」

さりげなく会話を振ったら、月ちゃんはむくれ顔で、映画のタイトルを答える。ブログで彼女はそれなりに良い評価していた映画だ。

「あれ？面白くなかったの？」

「映画は、面白かったよ！」

映画『は』ということは、デートは散々だったようだ。俺はその結果に満足し、ほくそ笑む。

「その映画、俺も観たかったのに、残念！俺誘ってくれればよかったのに」

「そうだったね、確かにその方が楽しめたかも」と素直に頷く月ちゃんに俺は、なんか知らないヤツだけど其奴^{ソイツ}には勝った！と確信した。

「そうそう、また、映画に行かない？」

『そうね』と俺をみて答えている彼女の視線が、俺の後ろに移動しニッコリとする。河瀬さんが微笑みながら給湯室に入ってくる。そして俺の方をチラリとみる。

「でも、黒沢くん映画は、彼女と行ったほうがいいと思うよ」

会話を聞いていたのか、河瀬さんは思いもがけない言葉を突然放つてくる。

「え？ 何言っているの？」

俺は思わず聞き返す。月ちゃんはキョトンと上品に笑う河瀬さんを見る。

「友ちゃん『は』陰険じゃないから、何も言わないとは思うけど、彼氏が他の子と映画観に行くって、内心快い気分ではないと思うよ」

「チョット、まって、俺……」

慌てて訂正しようとしたが、月ちゃんは納得した表情で頷いている。『そうだったんだ〜気付かなかった〜でも、なるほど』とかつぶやいている。

「隠さなくてもいいわよ！ 社内でも評判よ！ 最近仲良く仕事上がり飲みにいっているし、週末も一緒に遊んでいるから」

河瀬さんは、いつになく俺に明るく親しみのある笑みを向けてくる。でも何でだろう、彼女の笑みからはまったく親愛の情を感じない。寧ろ敵意を感じる。

確かに、松ちゃんとは最近頻繁に呑みに行っているし、彼女に誘われバーベキューとかにも行っていたけど、何処でそれが付き合っているとなっているというのだ？

第一、彼女には恋人がいる。

「なんだ、そうなら言ってよ！ 二人で応援するから」

月ちゃんは河瀬さんとニツコリ微笑みあってから、コチラを見る。比べてみるとよく分かる。本気で祝福し応援し笑っている月ちゃんと、俺に悪意をもって笑いかける河瀬さん。

何故ここまで嫌われたのだろうか？ 蜷川の件で不快な思いをさせたのは分かるが、まだそれを根に持っているというのか……。河瀬さんは、社内での男性からは滅茶苦茶が人気ある。見た目は楚楚とした日本美人。ウチの会社には珍しいお嬢様タイプだけにチョットしたマドンナ状態である。基本的に穏やかで浮いているわけではないが、人とはチョット一線を引いて付き合う所がある。そういった所がミステリアスで他の男性には、さらに堪らない魅力なのだろう。その河瀬さんが唯一社内です心を許しているのが月ちゃん、一緒に有給休暇をとって海外旅行したりしている。逆にいえば月ちゃんに近い人間の一人が、俺をここまで敵視している理由は何なのだろうか？

フロアの方から、月ちゃんを呼ぶ声がして、彼女は『じゃあね』と言いながら、戻っていった。

微妙な空気の二人が取り残される。

「あのさ、変な噂流さないでくれない？ 俺、松ちゃんとは付き合っていないし」

俺はつい、咎める口調になってしまう。

「ふーん、まあどうでも良いけどね。私関係ないから。……知ってる？ 百合ちゃんって潔癖だから妻帯者とか恋人の居る人、一気に恋愛対象から外れるの」

俺はニコやかに、トンデモない言葉を言ってくる河瀬さんにゾツとする。知らない内に最悪な敵を作っていたようだ。河瀬さんの俺に対する感情はいったい何なのだろう？　もしかして月ちゃんに対する感情が友情ではなく愛情で、俺が恋のライバルって事なのだろうか？　といった馬鹿らしい事まで考えてしまう。

松ちゃんと俺が付き合っているという噂は、河瀬さんが流したわけではなく、元々社内ではささやかれていたらしい。俺が必死で打ち消そうとする甲斐なく社内での認識はそういう事になっていた。

しかも、今の状況で唯一の仲間であるはずの松ちゃんは、彼氏と二週間の海外旅行に出た直後だった。

「あの、荻上さん、貴方なら知っているでしょう、松ちゃんに彼氏いるの。だから月ちゃんにソレとなしに誤解だって話してくださいよ」

味方という訳でもないが、多分敵ではない荻上さんに助けを求めろ。松ちゃんのバーベキューメンバーでもある荻上さんは、松ちゃんの彼氏にも会っている。それに月ちゃんが慕う彼女の言葉なら誤解も解けやすいだろうと考えたからだ。

「人のプライベートに関わる話を、ペラペラ話すのって私は嫌いだから」

軽く一蹴される。

「あの……」

「そういう事って、自分で何とかするべきでしょ！」

荻上さんにしては珍しく、ニッコリと愛情を感じる優しい笑みを浮かべる。言っている言葉はちっとも優しくはなかった。

松ちゃんとの噂は彼女が旅行戻って来ることと解消はされる。彼氏の存在をアッケラカンと公表したことで、彼女は俺と付き合っている事を否定した。

しかし何故か、俺と松ちゃんが付き合っていたという部分は消えなかった。社内の認識では、松ちゃんに見切りつけられ振られた事になっているようだ。俺が必死で否定していた事が、そのような印象をみんなに与えたらしい。

唯一の救いは、可哀想にこっぴどく振られたという事になっている俺に対して、月ちゃんは冷たい視線ではなく、労るような同情的目で見ていることだけかもしれない。

うるさい女たち（後書き）

【うるさい女たち】 1987 米

Outrageous Fortune

監督…アーサー・ヒラー

恋するための3つのルール

恋する女性というのは、分かり易い。ヘラヘラ馬鹿になるだけの男性に比べれば難しいが、良くみていたらすぐわかる。『綺麗になる』という『当社比何%』的な曖昧な見分け等ではなく、もっと分かり易く行動に現れる。まず、服装の趣味が微妙に変わる。新しい趣味をもつ。携帯をやたら気にするといった行動が出てくるとより完璧である。

こんな現象が起こり始めると、それはその女の子が恋をしている証拠。

夏になり、爽やかなブルーのストライプのタイトなインナー白い薄い生地ของフードのついた上着に、紺のパンツにヒールのあるサンダルと、夏らしいファッションの月見里百合子を俺はシゲシゲと眺める。

実に彼女らしい、シンプルで爽やかな服装だ。でも、この違和感は何？

「3Dとか、最新技術とかいうのもどうかと思ったんだけどね、やはりあの映像はI-MAXで観るべき！これだけは声を大にして言えるよ！ やっとコンテンツがI-MAXに迫いついたという感じ」

週末観たという映画を熱く語るのもいつもの通り。俺は営業ビルまでの道のり月ちゃんといつものように映画の話で盛り上がった。いた。

「でもさ、I-MAXって映画館限られているのが辛いんだよね」

確かに、面白そうだけど、関東にI-MAXシアターが二カ所しかないのが辛いところである。値段も普通の映画に比べ、お高い。

「映画自体が面白いかどうかは置いて、映画界の流れを変える、分岐点となる作品だとは思うよ」

そういつて、自分の言葉に頷くように首を縦にふる。

「なるほどね」

なら、俺も行ってみようかなと、月ちゃんの顔を改めて見つめる。そして最近の違和感の原因に気付く。顔がなんか近いのだ。

「月ちゃん、背伸びた？」

そう言うのと、ムっとした顔になる。足下をみたら、彼女にしては高いヒールを履いている。動きやすいファッションを好む彼女は、あまりヒールの高い靴は選ばなかったような気がする。

「それ、嫌味？」

そういえば、最近の彼女の靴は、ヒールが多い。

「あ、靴か、いや、珍しくない？　そういう靴はくの」

月ちゃんは大きくため息をつく。

「だってさ、信子先輩にしても、河瀬さんにしても、友ちゃんにしても、みんな背高いから、一緒にいると、私凄いチンチクリンに見

えるじゃん」

彼女が、身長低めなのを気にしているのは知っていたけど、何で今更とも思う。それに、百五十センチ半ばで、本人が言うほど小さ過ぎる事もない。

「いや、女の子ってさ、寧ろ小さいほうが可愛くない？」

でも、小さいという単語が気に入らなかったのか、ジロっと睨んでくる。コチラが良しと思っても、女性にはコンプレックスに感じている箇所の会話はタブーであった。

「身長だけ可愛いといわれてもね……」

そう言いながら、左手で髪を掻き上げる。その腕に初めてみる腕時計を発見する。彼女が好みそうな、レトロな味わいのアナログ時計だ。

「あれ？ その時計いいね！」

彼女の顔が、途端に嬉しそうになる、取りあえず話は逸らせそう。彼女は面白いデザインの腕時計を好む。デジタル時計は嫌いなようで、アナログでデザインの凝った時計をいつも身につけている。ブランド品とかいうのではなく、雑貨屋さんとかブティックで見えて一目惚れしたものを買ってくるようだ。

「分かる？ デザイナー手作りで、一品モノらしいの！ この機械というのを前面に出した雰囲気が良いでしょ」

部分的に装置をあえて見せるデザインのそれは、確かに面白かつ

た。

「ジブリ映画に、なんか出てきそうだね」

俺の言葉に、嬉しそうに微笑む。

「だよね！ 私もそう思った。ボーナス出た後だから、迷わず買ったよ」

「なんか分かる、面白いな、何処で売っていたの？」

「渋谷から表参道の間にある裏通りの雑貨屋さんにあったの」

なんか違和感を覚えるのは気のせいだ、いつもの通りの彼女だと俺は安心する。

というか、気のせいだと俺は自分に言い聞かせた。

恋するための3つのルール（後書き）

【恋するための3つのルール】 1999 米

Mickey Blue Eyes

監督…ケリー・メイキン

この物語で語られている映画は『アバター』をイメージしています。物語的には、アメリカチックであまり素晴らしいとはいえませんが、この作品によって、映画の表現の仕方・見せ方というのが大きく変わったとは思っています。しかしその後の何でもかんでも3Dにするという流れはチョットどうしたものかとも……。

恋に落ちたら…

恋する女性というのは、分かり易い。?? 中略 ??それはその女の子が恋をしている証拠。

(前話【恋するための3つのルール】参照)

ブログ、『月夜の映画館』をチェックする。コメント一覧を確認すると、『星』と相変わらず仲良く交流は続いている。そこはいつもの通り。

しかしメニューとなっているサイドコラムに突如現れた違和感のあるものを俺はシゲシゲ見つめていた。

映画ブログなのに、なんで名古屋グランパスエイトのマスコットの時計ブログパーツがついている？

そういえば、夏頃試合を観戦しにいったとかいうサッカーの熱い記事も載っていたなと俺は思い出す。今までブログで映画意外の話題をしたことなかった。でも彼女がそのマスコットを最近気に入っているという話は聞いたことはある。

「サッカー好きだったの？」

尋ねる俺に、笑って頷く。

「大好きだよ、いつもW杯の時は毎回睡眠不足でへロへロになるほど！」

といった会話もした。

だから、サッカーも好きで、気に入ったマスコットのブログパー

ツがあったから、活用したという事だろう、と俺は結論つける。

でも、その他にどうしようもない違和感をこのブログから感じる。一つ目は、映画を観る本数が、明らかに最近増えているのだ。映画館で月二本程度の見ていたはずの月ちゃんが、最近は月に4本は軽くみている。用事がなければ毎週土曜日に観ている感じだ。しかも、一日・二十二日などの映画サーブیسデーが土日の場合においては一日に映画を二本以上梯子鑑賞という、とんでもない荒技をしてみせている。一日はともかく、二十二日に映画を複数観るという意味に、俺は眉を顰めざるを得ない。二十二日、映画館において『夫婦の日^{フルデー}』の日。つまり男と女で映画を観なければ、安くないということだ……。

二つ目は、その鑑賞している映画のジャンルが広がった。前までは明かに倦厭して観なかったハリウッド馬鹿アクションとか、ハリウッド系ラブコメとか、ホラー系といったモノまでも観て、愛ある暖かい目で感想を書いている。場合によっては熱く語っている。

三つ目は、ブログに『太陽』という人物の陰がチラチラしてきた事。ここが意味一番、気になる所。

『太陽』という男が最初にブログに現れた時の事は、俺は不思議と覚えていた??

蜷川と付き合っていた事で、読むだけになっていた『月夜の映画館』、別れた後に久しぶりにコメントでも入れようとした入力欄の上に、そいつのコメントがあったのだ。

『そういえば、ブログやっていると聞いたので、遊びにきました。なんていうか、見事、俺の好みじゃない映画ばかりだね。でも面白くていいんじゃないかな。』

また、機会あれば、遊びにきます

太陽』

記事ともまったく関係のないし、彼女のブログの世界を全否定したと取れるそのコメントに俺は、『何だ？ コイツ訳分らない』と思ったもののあまり気にしてなかった。

『太陽さんへ

コメントありがとうございます。

まあ、太陽さんが好きそうな映画の記事はここにはないでしょうね』

そのコメントに対しても月ちゃんは珍しく冷たい反応のコメントを返していた。

だけど、そいつは度々このブログに登場するようになる。しかもそれは、予期せぬ形で。

月ちゃんがよく参加している、映画ブロガーのオフ会にコイツは出席したようだ。月ちゃんのツレとして。そしてそのオフ会が行われたと思われる後に、オフ会に出席した他のブロガーの『太陽さんとコアが映画談義やサッカー談義も楽しかった』『月さんと太陽さんのラブラブっぷりに当てつけられてしまいました』といったコメントに対して返事を、『月』じゃなく『太陽』がコメント返しをしている。その後、他のブロガーと太陽が何故かこのブログで対話している。

俺は、月ちゃん本人にそれとなしに、彼氏の存在を探るが、ポカンとした顔で『いないよ！ そんなの』と答えるだけ。

念のため荻上さん等にも探りを入れるが、『早くいい人見付けて

欲しいけどね〜アンタ以外で』といった感じの答えかえってくる。

『星』以上に厄介な存在が現れた？　そもそも『太陽』って何者？

恋に落ちたら… (後書き)

【恋に落ちたら…】 1993 米

Mad Dog and Glory

監督…ジョン・マクノートン

日曜日が待ち遠しい！

カーテンで区切られた椅子が七つ置かれた丸いテーブルに、俺と月ちゃんと荻上さんと西河が座っている。このメンバーでそれなり楽しく会話しているが、なんとも不思議な組み合わせである。

月ちゃんは職場において荻上さんを尊敬し彼女を目指しているようで最近では言動までも真似し始めている。そして西河は月ちゃんを理想としているようで月ちゃん風の仕事や人の接し方を真似している。となると最終的に西河は荻上さんのような女性になるのか？という絶対そうはならないだろう。現段階において、月ちゃんは月ちゃんのまんまだし、西河は西河のまま成長していつている。西河は課が同じだから、俺とはそれなりに仲よいが、荻上さんとは接点が殆どないように思う。多分、月ちゃんがいなければ、このメンバーでこの店で飲むことなんてないのではないだろうか？

暫くすると、入り口の所にウチの会社にはいないOLという感じの可愛い女性三人が入ってくる。その三人を見てそういえば、エレベーターで時たま会った事があるなど改めて思い出す。女性というより女の子という可愛さをもった、真面目そうな雰囲気が蜷川となんとなく似ている。

月ちゃんはその子らに手をふると、その三人も手をふりながら嬉しそうに近づいてくる。そう彼女達が今日の飲み会の残りのメンバー！今日は実は月ちゃんが同じビルの六階にある会社の高森物産に勤めている女の子をエレベーターでナンパしたのだ。そして女子会を開くことになり、それに俺が便乗した状態。

何故、態々女子会に厚かましく参加したかって？お酒の席だと結構恋バナに発展しやすいから、月ちゃんにもう彼氏がいるのかどうかといったのも、見えてくるかな？と思ったからだ。純粋に飲み会を楽しみたいというのもあったけど。

結局喋っているのは、俺と月ちゃんと高森物産の女性三人が中心で、それに時々荻上さんが茶々を入れるという感じで会話は和やかに進む。西河は皆の言葉に相槌を打ったり、驚いたりと反応して楽しんでるようだ。

「モリシマさんって、ウチと違って若い人多くていいですよねー楽しそうで」

月ちゃんは、俺や荻上さんに『そうかな?』といった表情で問いかけてくる。

「ウチは、オジサンしかいなくて!」

眉を困ったように寄せて、高森物産の女の子の一人が答える。

「あら? 時々三十代前後の方、エレベーターでお見かけしますが」

月ちゃんは首を傾げる。

「ウチって、本社関西なので、出張で時々若い人くるけど、基本いるのはオジサンばかりで、そうでない人も既婚者ばかりなんですよね」

「まあ、恋愛したいというのではなくて、私達が会社で少数派になるのが辛くて」

高森の三人の女の子は『ねえ』と頷きあう。

「そんなんでしたら、ウチの会社のモノが、喜んで話し相手になり

ますよ!」

俺の言葉に、月ちゃんと西河はうんうんと頷いているが、荻上さんはジロっとコチラを睨んでくる。

「まあ、若いのいても、ウチの会社のようにロクなのがないのも困りもの、恋愛相手としては微妙でもにぎやかにはいいよ!」

荻上さんの言葉に皆笑う。

「そうかな〜俺なんて、優良物件だと思うけど、ね、月ちゃん」

急に話しかけられて隣の月ちゃんはキョトンとするが、ウーンと悩んでいるようだ。

「まあ、そうかな〜? うん!」

何だろう、その微妙な言い回しは……。

「そういう含みある言い方止めてよ! 高森さん誤解するじゃん」

月ちゃんは、大袈裟に嘆く俺にヘラッと笑う。

「いやいや、高森さん、この人は頼りがいあるし、優しいし、イイ奴だよ! ホント、ホント! 仕事一緒にしていると分かるけど」

月ちゃんは西河に『ね!』っと同意を求める。

「仕事の仕方で、その人の人間性ってよく見えませんか? 仕事しているときって本性が剥き出しになる感じで」

皆、その言葉に、『分かる、分かる』と頷く。確かに、仕事の向き合い方で、コイツ調子よくて狡いな、とか生真面目で頑固な感じとか見えてくるものがある。

「黒くんの仕事の仕方って、本当に真面目で誠実という感じで協調しながら作業を進める感じなの。一緒に仕事していても物事がスムーズに進むのよね。そういう所凄いなと思う。周りをよく見ているし」

俺は彼女の言葉にチョット感動する。俺の事を、そのように見えてくれたという事が嬉しかった。

結局、その日の飲み会は月ちゃんに本当に恋人がいるのかどうかは聞けなかったけど、その言葉を貰えただけでも来た甲斐があったように思う。

散会になり、俺はJRの駅の方に向かう月ちゃんを追いかける。

「あ、月ちゃん！俺もそっちだから」

「あれ？ そうだっけ？」

不思議そうな顔の月ちゃん。そうか、彼女に引っ越しした話はしてなかった。

「うん引越したから、新宿方面で方向も同じ！」

「そうなんだ、小田急？ 中央線？」

月ちゃんは、横浜に住んでいる。

「中央線で中野の方！　その方が終電も遅くて楽だから」

「なるほどね！よく会社泊まっていたもんね！　それはそうと、今日は残念だったね！彼女ゲットできなくて」

俺は苦笑する。荻上さんがサドッ気を発揮し、俺を散々貶めてきたのだ。それはいつもの事で気にはないが、月ちゃんにも女漁りにきたように思われているのかとチョット悲しくなる。

「俺ってそんなに、彼女欲しさにガツガツしているように見える？　純粹に交流楽しみたかっただけだけどね。　月ちゃんとも久しぶりに飲めたし」

そんな俺の言葉に、フワリと柔らかい笑みを返してくる。

夜の道を歩きながら、二人で他愛ない会話を楽しむ。彼女の体温を隣に感じ、その熱が俺の心を熱くする。

「それはそうと、久しぶりに映画でも行かない？　今週末とか！」

俺は、勇気を出してデートに誘ってみる。今ココには邪魔する者は誰もいない。

「いいね！　あ、でも　日曜日でいい？　土曜日用事があった」

楽しそうに彼女は答える。

「電車そろそろ来るよ、走ろうよ！」

彼女の声で、二人は同じ方向に向かって走り出す。

ところが彼女のヒールが道路の溝に引っ掛かったのか、月ちゃんがコケそうになる。俺は慌てて腕を引き寄せることで防ぐ。

一瞬だけ腕の中に抱く形になってしまった。彼女の髪から、出会ったときと同じシャンプーの香りがする。自分の体温が少し上昇するのを感じた。

「ゴメン、助かった!」

月ちゃんは照れたようにへらっと笑う。

「危ないな〜! そんなヒールなんて履いているから!」

「それでも、厳選して、かなり歩きやすさを優先したバランスの良いものにしてるんだよ! じゃあ、走ろう!」

そう言って走り出す。確かにヒール履いているわりに、その走りは自然で軽い。俺達は走ったお陰で、狙っていた電車に乗る事が出来た。

「ところでさ、最近、なんでヒール履いているの?」

月ちゃんは、視線をあげて『うーん』考える。

「気持ち良いからかな?」

「気持ち良い?」

意外な言葉に俺は思わず聞き返す。周りの人が、大きめの声になってしまった俺の方を怪訝な顔でみる。公衆の面前で変な会話していると思われたようだ。

「なんかね、いつもよりチョット高めの視線が、もっと広い世界を見る事ができるような、そんな感じというのかな？」

周りの空気を察して、月ちゃんはあえて周りにも聞こえるトーンで会話を続ける。なんか言いたい事は分かったような気がする。そして、彼女がヒールをはき始めた理由が、好きな人の為に、女らしくしたいとかいうのではない事にちよつとホツともした。

「なるほどね。で、ヒール分なんか良いもの見れた？」

月ちゃんはちよつと考えてニツコリと笑う。

「タツプリと色々ね！」

「どれどれ」

俺はちよつと屈んで、月ちゃんの目の高さに自分の顔の高さを合わせて外の景色を見る。確かにいつもよりチョット世界が違ってみえた。

そんな俺の行動に、月ちゃんはビックリした顔をしたが、フツと柔らかに微笑んだ。

日曜日が待ち遠しい！（後書き）

『日曜日が待ち遠しい！』1982 仏

V i v e m e n t d i m a n c h e !

監督 脚本…フランソワ・トリュフォー

コチラの女子会は『半径三メートルの箱庭生活』の

『二メートルの世界 <2>』にて、描かれているのと同じです。

恐怖の土曜日

女性は感情的、男性は理性的って一般に言われるけど、恋愛に関してはその逆じゃないかと俺は思う。

ティーンの時から、その兆候はあったものの、成人を超えるとさらにその傾向はハッキリしてくる。

特に恋愛が終わる頃の女性は凄まじい。自分の気持ちを的確に分析し男を取捨択一していく冷静さは、男からみて心が冷えるものがある。

俺と月ちゃんが訪れた劇場の中で、今まさに一つの恋愛が終わろうとしていた。

といっても俺と月ちゃんの二人の間ではなく、その前列にいる若いカップル。

別れを切り出す為に、男を映画に呼び出す女。そして、そんな事も気が付かずヘラヘラやってきた男。

この男の痛い所は、だんだん冷めてきていたであろう彼女の態度に全く気付いていないどころか、今日まさに今、別れを切り出されている事にも気付いていない。

完全に女の中から消えた愛と、まだまだラブラブなつもり男。どこまでもかみ合わない二人の会話。本人達は大まじめだが、端からみると喜劇である。

とはいえ、この男程馬鹿ではないにしても、俺自身似たような経験をしてきた事があるだけに、笑うというより苦笑いになるが。

月ちゃんは、目の前にいきなり繰り広げられたドラマに、肩を奮わせている。リゾート地を思わせるエキゾチックなワンピースに丈

の長い軽い上着を羽織った感じで、ナチュラルテイストな洋服が良く似合っており、彼女のより穏やかな魅力を増していた。会社での格好よりも、プライベートでのラフで柔らかい感じの格好の月ちゃんの方の方が俺は好きだ。

「いやゝ凄いドラマだねゝ」

「喜劇だよ」

笑いながら、こそこそと顔を寄せ合って話す俺達は、恐らくまわりの人からみれば、ラブラブなカップルに見えるだろう。

でも、完全な俺の片思い。俺は、今日が日曜日であるという事に引っかけりを覚えていた。

日曜日に彼女と映画に出かけたのは、初めて。彼女は大抵、外出を土曜日に決め、日曜日は身体を休めつつ、家の事をするというパターンで過ごしてきたと記憶している。

土曜日は用事があったから、俺との約束は日曜日になったわけだ。そして土曜日の彼女は何をしていたのか？ ブログをみると、映画に行っていたようだ。誰と？

映画が終わり、俺達は外に出る。秋だというのに嫌味な程、太陽が輝いている。月ちゃんはそのような太陽を浴びながら『最高に良い天気だねゝ』と嬉しそうに笑っている。

俺は太陽から逃げるように、裏道にある小さな喫茶店に彼女を誘う。

観たのが偶々、男女の恋愛感のズレを描いた映画だったこともあり、話題も恋愛方面に。

月見里百合子が好きだという映画『ベティーブルー』の話にな

る。有名なフランス映画で、激しい愛に生きる女性ベティーと、ただそれを能動的に受け入れる男ゾルグとのラブストーリーで、愛によって関係が壊れていくというフランスらしい恋愛感の映画。

「私、あの映画大好きで、観て凄い衝撃を受けたんだ」

俺は凄い恋愛だとは思ってたけど、感情のまま愛に走るベティーという女性には惹かれなかったし、ベティーがああなるまで自分から積極的な努力をせずただ見守るだけのゾルグという男性の生き方もちょっと許せなかった。彼がもう少し別の行動をしていたら、ああいうラストにはならないのでは？　ゾルグがもっと確かな形で彼女に愛を与えていたらベティーは追い詰められなかったのでは？　とさえ思ってしまう。

「女性は、結構好きだよね、あの映画」

「相手とか、周りとかまったく気にしないで、愛の為に生きて壊れるって、私には絶対出来ない行動だしね！　そういう所が格好良い！　と思ったの」

「格好良い……？」

ベティーという女性に対して、予想もしない言葉に俺は驚く。

「そう、でも私はいったら、前の彼氏が実家に戻るために関東離れると聞いても、『そうなんだ、仕方が無いよね』という言葉返すだけで、相手を追いかけるとか、泣いて止めるといった事も一切出来なかった」

仕事でも彼女は前面に出て何かをするというのではなく、どちら

かというと一步引いて調和をとりながら物事を進めていくタイプ。恋愛に関しても、いつも一步引いた形で月見里百合子は生きてきたのだろう。だからこそあんな無茶苦茶な愛し方をするベティーに対しても憧憬の念を抱いたようだ。荻上さんを彼女が憧れ慕うのもそこにあるのかもしれない。本当はもっと前に出て行動したいと思っているのだろう。

初めて彼女の口から語られる、星野秀明の話。でも俺はその時の月ちゃんの表情から何か分かってしまった。それは完全に愛が終わった相手の話をしている事を。逆にだからこそ、俺にその話をする事が出来たのだろう。

俺に別れを告げてきた過去の恋人と同じ目をしている。ハッキリ終わった愛の話をしている女のだ。

「黒くんは、引きずってたと言うけど、違ったかなと、今分かった。ハッキリした『サヨナラ』のイベントがなかったから、気持ちが整理できなかっただけなんだと、今にして思う」

彼女は明るくヘラッ笑う。

「……たしかに、自分で納得して別れないと、後ひくよね」

今まで散々待ち望んだ瞬間。彼女の中から『星』が消える事。

「人生にも、句読点って必要だね、本当に！」

そういつて顔を上げた彼女の目は、新しい未来をを見ているように感じた。

「上手いこというね！」

俺は、内心複雑な気持ちでその表情を見ていた。

彼女が静かに見つめる未来に、俺はいるのか？ 真っ直ぐ前をみる彼女の目には、目の前

にいないはずの俺の姿も映ってない。

「でしょ！」

いつものように、俺に笑いかける彼女。そう『いつものように』つまり、今までとまったく変わらない笑顔。

「あのさ……」

月見里百合子が廊下などでコッソリ携帯のメールを見ているときの、心底嬉しそうな笑顔とは違って、いつもの笑顔。

「ん？」

「俺達さ……」

首を傾げ、俺を見上げてくる彼女。俺の頭に『太陽』の存在がよぎる。『付き合わない？』という言葉が続けたかったけど、言えなかった。

「来週も、また映画、何か観ない？」

彼女は、俺の言葉にチョット考える。

「んー。来週も土曜日は用事入りそうだから、日曜日でよければ」

彼女は、『誰か』の為に土曜日の予定は入れるつもりはないようだ。

「……。OK！」

俺は苦笑するしかない。

その後、何度か彼女を映画に誘ったが、彼女の土曜日は空くことがなかった。

そして、気が付いた時には、彼女のブログ『月夜の映画館』から『星』のコメントが消えていた。何があったかは分からないけど、二人は完全に別れたようだ。

※ ※ ※

一月程後、月ちゃんは二十五歳の誕生日を迎えた。知っていたけど流石に彼氏でもない男が、誕生日プレゼントを買うのは躊躇われる。

同期の河瀬夏美らが誕生日プレゼントを渡しているのを見て気が付いたというスタンスで、俺は営業の途中で彼女の為に髪飾りを買った、プレゼントした。

会社で、ソレをつけて仕事をしているのを、俺は密かに喜びを感じていた。

そして、誕生日の週が明けた月曜日、俺は彼女の腕にえらくゴツイ時計があるのを見付ける。

カシオのBaby-Gだ。細い彼女の腕にはやや重そうに感じる。彼女が絶対選びそうもないタイプで、しかもデジタルタイプ。

「あれ？ その時計」

話を振ると、へへへと笑う。

「カシオのTripper！ 電波時計で耐衝撃構造、防水のタフソーラーなんだ！」

？？タフソーラー？？

太陽の光で動く時計……。

その時計が刻む時は、何へ向かう時間なのだろうか？

恐怖の土曜日（後書き）

恐怖の土曜日 1955米

Violent Saturday

監督…リチャード・フライシャー

この時二人が、観ていた映画は『そんな彼なら 捨てちゃえば？』という設定です。

『そんな彼なら 捨てちゃえば？』は、結構最近多いテーマ、男と女の恋愛の考え方の違いを描いた作品です。ご興味があればエッセイ『物語に出てきた映画の簡単な紹介』において解説をしておりますのでどうぞ。

コチラのデートは『半径三メートルの箱庭生活』において

『一メートルの世界 <3>（から圏外を覗く）』の章で描かれたイベントと同じものです。その前のカップルの会話を知りたい方はコチラをどうぞ。

<http://ncode.syosetu.com/n15030/7/>

恋と涙の太陽

今年の冬は、あの猛暑の夏が嘘のように激しく気温を下げていった。もうすぐ十一月になろうという所だが、もう冬を思わせる気候となっている。

こんな寒いのに、脳天気にデイズニーランドに行って来たヤツがいるようだ。外勤から帰ってくるとキャラクターの入ったチョコクランチが机に置いてあった。

「あ、それ月ちゃんのお土産ね」

菓子をしげしげ見つめっていると、同じ課の人が教えてくれる。

さようですか……。

「月ちゃん、チョコクラ、サンキュー！」

俺は隣のグループの月ちゃんに声かけると、顔を上げてニッコリ笑う。最近は髪を伸ばしてきたようで、軽くウェーブのかかった髪型が、彼女を華やかにみせている。月ちゃんのおでこに、俺があげたヘアピンが光っている。それを見ると心がチクリと傷み、その気持から逃げるように給湯室へと向かう。

廊下を出たタイミングで、後ろから声がかかる。河瀬さんが白い封筒を俺に差し出す。この河瀬さんからのラブレターなんて良いものである筈はない。同期である井口の結婚式の招待状である。井口もその相手である同じ課の上司も直接は俺に渡しにくいものがあったようだ。

俺は苦笑しながら受け取るしかない。同期と直属の上司の結婚式

となるとあまり気は進まないけれど出るしかないだろう。

「じゃあ、確かに渡しておいたから」

河瀬さんは用事が終わったとばかりに、俺の側から離れようとする。

「あ、河瀬さん、あのさ」

俺は思う所があって、つい呼び止めてしまう。河瀬の冷たい目が俺を『なに?』と見返してくる。日本人形を思わせる顔立ちだけあり、こういう表情をしていると怖い。

「……月ちゃんの、彼氏ってどんな人なの」

河瀬さんは眉をしかめる。

「いいヤツ? 俺より良い男?」

冗談めかして聞いてみる。

多分、河瀬さんなら、『太陽』の正体を知っている。知りたかった、どんな男なのか。

でも、何も答えず、冷たい視線で見上げてくる。

「月見里さんの様子みたら、大体分かるでしょ? 貴方もさっさと新しい彼女見付けたら?」

そう言って去っていく。

否定なしで、見込みないから諦めるときか。

元彼女の結婚式の招待状もらっても、何の動揺もしなかった俺だ

が、俺は自分で聞いておきながら、河瀬さんの言葉に心をざわめかしていた。

ここで食らいつくべきなのか、諦めるべきなのか？

恋愛なんてずっと上手くいくとは限らない。月ちゃんの恋愛が壊れるのを待つ？

『付き合おう』と言い出せないまま、時間だけが過ぎていく。いや、言うのを躊躇わざるを得ない状況になってから数ヶ月経ったと言うべきか。フラれるのが確実に告白するなんてマゾな事は俺には出来ない。もう月ちゃんに彼氏がいるかも、なんてレベルじゃない、コレはいるだろう！ 完璧に。

『月』の向こうに、『星』どころじゃない存在感を見せてくる『太陽』。

その『太陽』の存在感が俺の心を冷やす。

寒さを凌ぐ為に、俺は手頃な場所で暖を求める。この俺が、クリスマスの季節を一人寂しく過ごすなんて有り得ない。またクリスマスに男友達との単なる飲み会なんてもっと有り得ない。

会社の飲み会の帰り、現場の女の子とイルミネーションが綺麗な東京ドームを通り、そこでその娘にキスをする。それで新しい恋愛は簡単にスタートした。

月ちゃん以外の女性なら、こうも恋愛は簡単なモノ。不思議である。俺に魅力ないというわけでは無いだろ。

とはいえ、お手軽に始まった恋愛は、二ヶ月も持たずにアッサリと終わる。それなりに楽しくはあったけど、大した思い出もなければ傷もない薄っぺらな恋愛となった。

恋と涙の太陽（後書き）

『恋と涙の太陽』

1966

日本

監督・井上梅次

最後の恋のはじめ方

一月末、また彼女が居ないということで、俺は性懲りもなく月ちゃんを映画に誘う。

しかし、日曜日にも先約があつたようだ。彼女はチョット悩んだ顔をして、西河実和に声をかける。

「実和ちゃん、映画さ、黒くんも一緒でも良い？」

西河は戸惑う顔をしたが、すぐにニコリと笑う。だんだん月ちゃんっぽい笑顔が自然になってきている。

「はい！」

西河に、チョット悪かったかな？　と思う。せっかくの休みなのに、よりにもよって同じ課の人と出かけたくなかっただろう。

「じゃ、そういうことで！」

月ちゃんは妙に嬉しそうに、俺達に手を振って去っていく。

「ごめん、なんか俺、邪魔だった？」

西河に謝っておくが、彼女はビックリした顔をして首をブルブルンとふる。

「どうしてですか？　三人で映画楽しそうじゃないですか、あの映画楽しみに待ってたので、今からワクワクしてるんですよ！　黒沢さんと映画ずっと行きたいと思ってたし」

ニコニコお愛想でなく。本当に嬉しそうな西河の様子にチョット、ホッとする。

この時から、映画は何故かこの三人で観るのが当たり前になった。正直言うと、行く前までは西河を邪魔に感じていた。でも落ち着いて考えると彼女の存在はかなり助かる。

月ちゃんに対して、かなり複雑な感情を持っている俺が、二人つきりでいるのは嬉しい反面、苦しいというのも確か。というっかり気持ちをぶちまけて、この関係すら壊してしまう危険も高い。

西河の穏やかさが、三人の空間をよりまったりと平和なものにしてくれた。

そんな穏やかな三人の関係が、四ヶ月程続くが唐突に終焉を迎えることになる。

いつものように、三人で映画を観てから喫茶店で映画談義を楽しんでいた、そして今度、何を観るべきかと話していると、月ちゃんはチョット困った顔をする。

「私は暫く忙しくなるから、映画一緒に観に行けなくなりそうなの。だから二人が行きたいもの決めて」

「え?」

ショックを受けたような顔の西河。そんな西河に、月ちゃんはふわりと微笑む。

「実は、私……結婚することになったの。……で、その準備で色々バタバタしそうで」

西河は驚きつつも、月ちゃんの手を握って瞳を嬉しそうに輝かせる。

「そうだったんですか。おめでとうございます！　いつのまに、そんなに！」

照れたように笑う月ちゃん。そしてそんな月ちゃんに、彼女らしくなくテンション高く色々質問をしている西河。二人がこの時に俺の方を見ていなくて良かった。凄い顔になっていたと思うから。あまりの衝撃に息をするのを忘れる。動揺を悟られないようにテーブルの上の水を飲む、手は震えている。俺は二人に気付かれないように小さく深呼吸する。

「おめでと！　俺の知らない所で、そんな話進めているなんて、隅に置けないな」俺にも教えてよ！　その相手の事」

俺は努めて明るく、その会話に加わることにする。完璧な失恋に、もう笑うしかない。営業としてのスキルがこんな事にも役に立って。俺は、必死で笑顔を作り、いつもの陽気な俺を演じる。

「小学校の同級生なんだけど、去年の同窓会で友達になって」

『ほうほう』、と俺は頷き先を促す。

「で、映画の共通の趣味で仲良くなって、今年の三月に付き合うことにして、まあ、今に至るという感じがな」

思った以上に最近である三月という数字に引っかかりを覚える。だが月ちゃんがその前から、ソイツに恋してたのは確かだから、どのみち俺の出る幕なんて何処にもなかった。

「で、ソイツの何処にそんなに惚れたの？」

自分が傷つくのが分かっているけど、ここは聞きたかった。何故ソイツに惚れて、俺の方はまったく見てくれなかったのか。単なる結婚する友達への質問にしては詰問口調になったのを、内心不味かったかなとも思う。

月ちゃんは、うーんと考える。

「その人に会って、面白いと思えるものが増えて、世界が楽しくなったの。それにその人だったら、背伸びしないで自由なありのままの自分でいれるという感じなのかな」

月ちゃんは、照れたように笑う。

俺はその言葉にズキンと心が痛くなる。俺は月ちゃんからどう見えるか？　どうやったら振り向いて貰えるのかだけを気にして接してきた。彼女の存在に助けられてこの会社に入社して、そして社会人として成長も出来たというのに、俺は彼女に与えられてばかりで何を返したのだろうか？　何もない。

「うわー、月ちゃんがそんな惚気るとは、ビックリ！　こっちが照れ臭くなる。そう思わない？」

俺はあえて明るく茶化した言い方をして、西河に話をふる。西河は照れるなんて事ないらしく、目をキラキラさせている。西河も月ちゃん以上に幸せそうな笑顔だ。尊敬する先輩の幸福が嬉しくて堪らないという感じなのだろう。そりゃそうだろう、俺もコレが月ちゃん相手じゃなければ、素直に祝福して喜んだ。

「言わせたのは、黒くんでしょ！」

月ちゃんはむくれたような顔をする。顔が赤い。

「ソイツは、月ちゃんにとって、スッゴイ大事な人という感じが、いいね……なんか。じゃ……俺は月ちゃんにとってどんな存在？」

我ながら、自虐的だと思うけど、今しか聞けない。月ちゃんは、別に不快そうな顔も、馬鹿にしたような顔もしないで、真面目に俺の質問を考えているようだ。

『良い友達！』なんて言われると、正直痛い。

「うーん、一番近い言葉で言うなら、戦友？　って感じかな」

思いもしない言葉で物事を表現してくるのが、月ちゃんという人物。俺は意外な言葉に思わず聞き返してしまった。

「へ？　戦友？」

月ちゃんはアツケラカンと笑い頷く。

「ほら！　一緒に就職戦線乗り越えた仲だし、その後社会人になって大変な時期も一緒に励ましあって戦ったという感じでしょ？」

なんだろう、単なる『友達』という言葉より嬉しかった。可笑しいけど、俺を激しく落ち込ませているのも月ちゃんだけど、その月ちゃんの言葉に救われている。俺はつい、頬が緩む。なんか嬉しかった。

「相変わらず、月ちゃんって、上手い事いうよね！」

俺は頷くと、月ちゃんは『でしょ？』とニコっと笑う。

「なんか、いいですね、そう言いあえる関係って」

西河が俺達二人をみて、ボソつとつぶやく。そういえば、西河の代は、俺達の代と違って最初からバラバラな所があった。

「実和ちゃんも、そうだよ！　一緒に社会で戦っている友でしょ？」

月ちゃんはニコっと、寂しそうにしている西河に語ってから、俺を見て『ね？』と聞いてくる。俺は、素直にその言葉に頷いて、そして西河にも笑いかける。すると彼女はパッと顔を輝かせて微笑んだ。

「ま、戦友として、俺達二人で月ちゃんの結婚、祝って、精一杯応援するから、何でも言って！　出来る事ならなんでもするから」

西河は俺の言葉にウンウンと頷く。

月ちゃんは、今までで最高に嬉しそうで素敵な笑顔を俺に返してくれた。

失恋の痛手から流石に、新しい恋をする元氣も有るはずもない。横目で、結婚へ笑顔で向かっていく月ちゃんの様子を窺いながら……。

出会った時から、真っ直ぐ彼女だけを見てアタックしていたら、彼女は俺のモノになっていた？

今、何を言っても始まらない。全ては終わってしまった事だから。俺は大きくため息をつく。

二次会の幹事を率先して引き受けたのは、俺から月ちゃんへの想いを込めたエールを送りたかったからと、自分の手で結末を飾りたかったから。

月ちゃんが抜けることで、映画観に行くメンバーは俺と西河と二人だけとなる。月ちゃんの結婚による大失恋は、俺としてもかなりキツイ状態だった。それだけに、穏やかに隣でいてくれる西河という存在に救われた。

周りをシツカリ把握した上で気遣いをみせて穏やかな空気を作る月ちゃんとは異なり、西河は基本暢気な性格。物事何でもスローなテンポにしていく所がある。仕事においては、苛つく所もあるが、その鈍感な所が、今の俺には心地良いものがあった。こんなボロボロになった俺を、ホヨっとした空気を受け止めてくれる。俺は、その西河のやさしさにしばらく甘えてしまった。

最後の恋のはじめ方 (後書き)

最後の恋のはじめ方 2005米

H i t c h

監督…アンディ・テナント

理想の結婚

九月の大安吉日の土曜日。俺は、新横浜のホテルにて、憎き『太陽』こと大陽渚というヤツと対面することになる。

純白のウェディングドレスに身を包んで、色んな意味でため息ついてしまうくらい綺麗になっている月ちゃんの隣でヘラっとした笑いを浮かべた大男。

聞いてみたら身長は百九十あるらしく、標準よりやや上という俺でも、この男の隣には立ちたくないと思うほど体格は良かった。

顔のパーツがどれもハッキリしていて顔は濃く、星野秀明とあらゆる部分で真逆な顔のタイプであることが意外。しかし月ちゃんがその男に甘え、それを笑顔で受け入れる『太陽』そんな二人の様子は確かな絆を感じさせた。

教会で、二人が誓いのキスをするのを見て、来賓席からどよめきが聞こえる。流石にこういう場所であっても、堂々と人がキスされると、見ている方が照れてしまう。

「いやゝ月ちゃんも、エエの捕まえたみたいでホッとしたよ」

披露宴で俺の右隣からホクホクと嬉しそうな声が聞こえる。中島となった荻上さんは結婚して子供産みますます貫禄の加わったようだ。別に太ったとかではないが、黒いドレスにいつも以上にバッチリメイクがより彼女の威圧感を上げているのかもしれない。俺と違って大陽渚は、彼女のお眼鏡にも適ったようだ。

「いやゝバレンタイン手作りにしてきた所から怪しいと思ったけど、いい人いたんだねゝ」

松ちゃんはそう言ってから、俺の顔を見てハッとした顔をして誤

魔化したように笑う。俺は『もういいよ、吹っ切れた』という感じで笑い返す。

「本当にデッカいの捕まえましたよね」

井口改め、堀部となった成実が嬉しそうに料理にパクつきながら、それをうける。

「大陽さんって、大物ですよ、いろんな意味で。天然な所が、百合ちゃんにピッタリって感じで」

大陽渚は、この人を見る目の厳しい河瀬さんにも気に入られているという事は、それだけ信頼に足る男なのだろう。悔しいけど。

そして俺の左隣の西河は、月ちゃんに負けないくらい、目を輝かせニコニコとして、披露宴を見守っている。この会社友人席、この並びに月ちゃんの気遣いを感じる。どうせならサド気を宿らせた中島信子と松ちゃんの順番を入れ替えてくれたらもつと助かったのだが。先程からチクチクと俺を攻撃してきてチョット痛い。

俺は、改めて、大陽渚という男を観察する。こんなにも披露宴会場において、バクバクと食事を旨そうに食べ続けている新郎は初めて見た。河瀬の言うところの天然ってこういう面なのだろう。

月ちゃんはその男をニコニコ見ている。大陽渚の口が『旨いよ、コレ』とかいった感じで動く。月ちゃんは、フォークで自分の皿の料理を一口食べ、大陽渚へニッコリと笑う。楽しそうに二人はずっと喋っている。月ちゃんも新郎に釣られてか、結構パクパク料理を食べている。

誰もが、微笑ましく思うであろう仲睦まじい二人の様子に、思わず俺も笑ってしまう。

そんな話をしていると、お色直しの為に、主役が退場することを、司会者が伝えてくる。

映画『フェノミナン』のテーマ曲にもなった、エリック・クラプトンの『チェンジ・ザ・ワールド』のメロディーが流れ、新郎新婦が立ち上がり歩き始める。

入場が『2001年宇宙の旅』のテーマ曲『ツアラトゥストラはかく語りき』だったし、見事に映画音楽だけで構成された結婚式に、思わず笑ってしまう。映画ファンだという二人らしい選曲だ。

新郎新婦が、俺達のテーブルで立ち止まる。

月ちゃんはニッコリと笑い、『次は夏美ちゃんの番だね』と言いながら持っていた白いまん丸のブーケを、河瀬さんにそつと手渡す。河瀬さんはそのブーケを手に瞳を潤わせる。性格はともかく美しい女性なので、その様子がまた絵になり、結婚式場は盛り上がった。

「残りのパーツとケース、控え室にあるから、後で取りにきてね」

涙を流しそうになっている河瀬さんに悪戯っぽく笑いながら、耳打ちして離れていった。

河瀬さんも三ヶ月後、結婚する。一見、次に結婚する親友にブーケを渡すことで、幸せのバトンをしていくという素敵な演出にも思えるこの行動。実は本当にこのブーケを河瀬さんが結婚式で利用するという事実を、その後皆で押しかけた控え室で知ることになる。

二人で結婚時期が近い事で、共有する事になっていたようだ。まさか、このような形で手渡しされるとは思ってなかったようだ。

月ちゃんは、披露宴でプロポーズの再現をしたときに取り外して大陽渚の胸ポケットに挿したブートニアもシッカリ回収しブーケに入れる。そしてさらに式で利用したパーツとも組み合わせ、元の完

壁な形に戻す。それをケースにしまい、河瀬さんに改めて贈る。

※ ※ ※

月ちゃんのブーケはその後、松梨が利用し、そして今、俺の隣でウェディングドレスに身を包んだ西河が手にしている。なんかこのブーケは、社内においてデカイ幸せを掴めるアイテムという認識になっていた。

俺達は、この結婚式を迎えるにあたって、月……いや、大陽百合子にブーケを譲り受けただけではなく、ペーパーアイテムを作るのを手伝ってもらったり、アイデアやアドバイスをもらったり、と、色々助けてもらった。経験者ならではの意見は、本当に参考になった。お陰でリーズナブルでありながら、なかなか良い感じの式になりそうだ。

彼女には散々振り回されたのは確かだけど、就職の時、社会人になった時、そして妻となる女性への橋渡し、結婚する時、全て彼女に導かれている。

本当に大陽百合子には敵わない。特別な女性であることは、今も変わらない。

華やかな音楽とともに、披露宴会場に踏みだす俺と西河実和。

二人でお辞儀してから、介添人について会場をゆっくりと歩く俺達。目の端に大きいデジイチをもった大陽百合子を見付ける。

俺は西河に声をかけ、大陽百合子の方に促す。二人で彼女の方を向いたタイミングで彼女はカメラのシャッターをきる。そしてカメラを顔から離し、オメデトウといった感じでニッコリ笑った。

俺は、彼女に声に出さず唇だけで、全ての想いを込めて「アリガトウ」と伝える。それは、俺が彼女に一番伝えたい言葉。

そんな俺の想いが通じたのか、大陽百合子は明るい太陽のような晴れやかな笑みを返してくれた。

理想の結婚（後書き）

理想の結婚 1999 英米仏

An Ideal Husband

監督 脚本・オリヴァー・パーカー

これにて、黒沢明彦の物語は終わります。

ここまでお付き合い頂きありがとうございました。

皆様に、黒沢明彦が少しでも可愛いヤツだったと想っていただけたのでしたら幸いです。

また月見里百合子からみた世界の『半径三メートルの箱庭生活』もございます。良かったらそちらも楽しんで頂けたら嬉しいです。

多分、月見里百合子そちらとは、性格若干違って見えるかもしれませんが、あくまでも黒沢明彦にはこのように見えています。

現在、この黒沢明彦と月見里百合子それぞれの結婚準備期間を描いた『ゼクシイには載ってなかった事』と

大陽渚の入社二年目の話を描いた『三十五センチ下の沸騰点』と星野秀明の青春（高校時代）を描いた『アダプティッドチャイルドは荒野を目指す』（テーマが違うので、『みんな欠けている』シリーズに入っています）

<http://ncode.syosetu.com/n6668q/>

を現在連載中です。

あと あとがきとして『物語に出てきた映画の簡単な紹介』というエッセイがあります。

このシリーズで作中に出てきた映画について解説しています。この

映画ってどんな内容なの？
す。

気になられたらソチラで紹介していま

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7964o/>

伸ばした手のチョット先にある、お月様

2011年11月15日14時39分発行